
バカとテストと召喚獣 ~ coldlove 『馬鹿な君が好き』 ~

OOO・JANIKELU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣『coldlove』馬鹿な君が好き』

【Nコード】

N8501X

【作者名】

OOO・JANIKELU

【あらすじ】

その日…恋愛感情が消えた…

打倒Aクラス！僕らの力見せてやる！

吉井明久とオリキャラ達がくり広げる学園ラブコメディ！

汚れてしまった心は簡単には流せない…

プロローグ（前書き）

皆様初めまして！クロスオーバーを書いている途中ふとアイデアが浮かび気づいてたら投稿していました

更新は遅めですが良かったら是非読んでください！

プロローグ

『ごめんなさい。あなたと付き合う訳にはいかないの…』

その言葉を心臓をえぐり取られるよりつらかったのかもしれない

『だって…あなたと一緒にいたら私まで酷いから…』

恋愛とはなんてはかないものだろうか…

残酷すぎる仕打ち…周りからの目…

なんでこんな感情を持ったのだろうか？

…好きなのはいけないことだろうか？

誰か教えてくれ…

告白した彼女は哀れむように見ながら去る

『じゅめん！待った？』

『大丈夫だ。お前も苦労してるな』

『うっん…あんな奴どうでもいいよ。私はあなたがいいから』

『わかってるじゃないか』

なんだろう…彼女に利用されたのだろうか？

財布は軽く…ほとんど彼女の為に使った

そしてお人好しにも程があることを今日理解した

「……………」

その日……重い足を引きずりながら

夜の道を孤独に歩いたのだった

一問目：僕と起床と二度目の春

うらかな朝：優しい光が部屋を照らす　温かい光が静かに眠っている少年に降りそそぐ

「ん……朝？」

茶髪にまるでネジが一本抜けたような雰囲気を持った少年……吉井明久は目をこすりながら窓を見た

「今日も良い天気だ……」

明久side

ぐっと伸びをしつつ時計をチラリと見やる
目覚めにはちょうど良い時間だ……軽く欠伸をしながらベッドから降りた

「さて……今日も頑張らなくちゃね……」

二度目の春を迎え僕は私立文月学園の二年生になった
クラスは最下位のFクラスだけどなかなか楽しい生活は送っている
つもりだ

「それにしても…今日は珍しく早起きできたな…」

いつも目覚めが悪い…わけじゃないけど…

うん…いつもは8時前に起きてるからギリギリ大丈夫！

「弁当作らないとね…」

今日はみんなの分を作るって言ってたからなあ…約束は約束だし

自室から出て冷蔵庫を開ける

「何作ろう……久しぶりにパエリアでも作ってみようかな？弁当に
パエリアはちょっとおかしいけどまあ大丈夫だよな～」

材料を冷蔵庫から取り出しエプロンを着ける

「さて準備完了…まずはパプリカを…」

初日二日目…まあEクラスに買った後Aクラスに敗北し…格下げダ
ンボール…いきなり辛い状況になってしまった

負けた原因は雄二だ。

いや僕にも…いやいや雄二のせいだ！なんだよ53って？
小学校レベルの問題で53は正直ありえない…
あんなの余裕だよ…それ以外は無理だけど

「はあ…もう姫路さん達もFクラスに染まってきたるし…なんとか
しなきゃ」

別に僕にはどうでもいいけどこのままじゃ女子がいなくなるからね

あくまでもクラスの為だ。僕にとっては本当にどうでもいい

「よし…できた！」

うーん…いい匂いだ…流石は僕！弁当箱に詰めた後は朝食用も用意しなきゃ

しばらくいろいろと準備をした後、玄関を降りる
誰も居ない静かな静かな部屋…

「行つてきます」

僕はボソリと呟き静かに部屋から出て行った

まだ満開に咲きほこる桜…

けどそれには色がない…何故だろう…

まるで僕が見えていないかのように周りにいる人達は綺麗な桃色だと和んでいた

「…はあ…」

桜から目を離し再び歩き始める…こんなにいい天気なのに静かだ…周りは騒がしいけど…なんというか…うーんわからないや

「……………はあ」

居るよ…女子達が…こんな朝早くから…面倒だなあ

女子達はきゃっきゃっと桜を見て騒いでいる…全く精神年齢が低いな

とりあえず下を向いてその場なんとか通った…ふう危つく絡まれる
ところだった

じつとさっきの様子を眺めた後、鞆を持ち直し文月学園へと走って
行った

二問目：変更と紹介と運命の出会い

古びた教室…相変わらず酷い設備だここは…

ゆっくりと扉を開けて教室へと入った

「おはよう」

苦笑しながらみんなに挨拶する。これは僕らの日課だ

「おはようなのじゃ明久」

まず必ず最初に挨拶してくれるのは一件女に見えるけど美少年の木下秀吉。僕の大事な親友だ

「……………（コクコク）」

この無口な奴は土屋康太ことムツツリーニ…まあムツツリスケベツて意味なんだけど

「おう…早いな明久」

そしてこいつは悪友の坂本雄二…僕はこいつを地獄へ叩き落とすことを考えている

だって僕と雄二はそんな関係だからね

「おはようアキ！今日は珍しいわね」

このちょっと僕を馬鹿にしたように言っているのは島田美波
今日もポニーテールが似合っている

「おはようございます明久君。今日も頑張りましょう」

この人は姫路瑞希…学年で三位以内に入る優等生なんだけど振り分け試験で体調を崩し退席して今はFクラスだ
相変わらず可愛い顔だ

「二人共おはよう。今日はなんだか胸騒ぎがしちゃって」

そう言った後、席とは言えないダンボールの前に座った
うん…やっぱりダンボールだから違和感が

「ふう…」

みんながワイワイと騒いでいる中、僕は一番隅に座った
なんか落ち着くんだよ…
そこに姫路さんと美波が歩いてくる
なんだろう？

「あ、明久君昨日は楽しかったですよね」

昨日…ああ。そう言えば映画に連れて行かれたんだよね 雄二は幼
なじみの霧島さんと楽しく？見ていたし

幼なじみか…僕にはいないなあ…そこらへんは雄二が羨ましく思え
てしまうかな

「明久君？どうしたんですか？」

おっといかんいかん…つい考えに夢中になってたよ

「いやあ…そうだね。二人が満足してくれて良かったよ…あはは」

軽く手を振る…はあ…何でこんなに疲れてるんだろ
ただ…二人と映画に行っただけなのに

なんて考えてたらガラリと扉が開いた

「キンコーンカーンコーン。お前ら早く席に着け」

「あれ？鉄…西村先生なんで教室に？」

おかしな…担任は福原先生のはずんだけど…何でこんな暑苦しくて筋肉質な鉄人が

「ああ…そのことなんだがな見せてもらったぞお前らの戦争」

あれ？鉄人のボルテージがなんか上がっていったくない？

「まさか馬鹿なお前らがここまでやるとは思わなかった…だが結果的にはAクラスにお前らは負けた」

どんどん鉄人のメーターが上がって…駄目だスカウターなんか役にたたない！

「そこで福原先生に変わって生徒指導担当の俺がここの担任になった！喜べお前ら。みっちり指導してやる！」

「「な、何イイイイイ」」

「鉄人が…担任！？」

僕らの学園ライフは早くも地獄化しそうです…くそ！どうにか奴から逃げる手だてを…

「そして今日は転入生が入ってくるぞ」

「「何イイイイ!?」」

うわ…むさいしうるさい
なんでこんなにテンションが上がるかなあ…

「先生！転入生は女ですか!？」

「はあ…なんで貴様らはそういうことにはくいつてくるんだ…」

鉄人は溜め息をつく…そりやそうだ。僕だって疲れるよ

「喜べ…四人のうち三人は女だ」

『「イッーヤッフウウウ!」』

ああ…三人も来るのか。別にどうでもいいや勉強でもしておこ
科目はやっぱり日本史かな

「静かにしろお前ら。よし転入生入ってこい」

ガラスと扉が開き四人の転入生が入ってきた
ふーん…やっぱ可愛いね
みんなは鉄人に黙らされてはしゃがないでいた

「関原陽哉だ。趣味はゲームやスポーツ…それから…」

黒い髪でショートに吊り目の関原君は何か考えていたけどすぐに口を開いた

「まあよろしく！」

ないのかよ…まあとっさに思いつくのは難しいけど

関原君は苦い笑いをしながら後ろに下がり、入れ替わるように黒くて長い髪の子が前に出た
瞳は緑だ…

「初めまして…月夜光奈つきよみなっています。優しい人が好みです」

そう言うてにつこり笑うとみんなニヤケていた…その様子に月夜さんは若干引いてたけど

「しんのゆりえ新野友里恵です！陽哉君とは幼なじみで…」

そこで少しためる新野さん

『『幼なじみで…？』』

クラスみんなは武器を持って構えている…ちよっみんな何やってるのさ

「恋人です」

「おい！友里恵何決めて…うわあ！」

関原君の足元に大量のカッターナイフが…関原君…初日早々大変だね

新野さんは首を傾げながら後ろに下がった

新野さんは綺麗なクリアブルーの瞳に銀髪のように少し青みがかかった綺麗な髪が特徴だ
なるほど…関原君と新野さんは幼なじみ…新野さんは関原君が好きで勝手に恋人関係にしていると…勝手だなあ

「静かにしろお前ら。次で最後だな」

鉄人は呆れたように溜め息をついていた

鉄人の声に反応してずっと最後の一人が出てきた

『『おお…』』

最後の一人は茶髪にポニーテール…そして綺麗なクリアレッドな瞳に大きくも小さくもない胸…
スタイル抜群の体をしている

「あかさまです赤咲鈴です！好きなことは掃除とお料理です！」

（へえ…最近の子にしては趣味が立派だなあ…）

赤咲さんは桜の形をした髪飾りをつけている

「よし。四人は空いた席へ自由に座ってくれ…今日もしっかり勉強に励むように」

鉄人がそう言って出て行った後…まあどうなるかはわかったことだけれど

『諸君ここは何処だ!』

ほーら始まったよ…僕関係ないのに何故か捕まるんだよね
今日はバれてないから助かった…

『では異端審問を始める!!』

「ちよっ!何だ?」

関原君を遠い目で見ながら教科書へと視線を戻した

天気は晴れ…日差しがあたって影ができやすい

だから誰かがこっちに来たことはすぐにわかる

「あの…君が吉井君だよね？」

「ああ…君は確か月夜さんだよね？」

どうやらさっきの転入生達みたいだ。何の用かな…美波達みたいに馬鹿にしにきたのかな？

「うん！初めまして吉井君！」

そう言って月夜さんは前の席に座った

少し苦い顔になりながら僕はちよっとだけわからないように離れた

「やつほー！私は新野友里恵！よろしくねアッキー！」

「うん…よろし…アッキー？」

新野さんはニコツと笑いながら月夜さんの隣に座った

「うん！だって吉井明久だからアッキー！」

なんだそりゃ…まあいいや美波にアキって言われてるし

「あはは…よろしく月夜さん。新野さん」

なんだ…みんな僕を馬鹿にきたわけじゃないのか…そうだよね姫路さんみたいに優しい人なんていくらでもいるし…僕のことこの人達はまだ詳しく知らないしね

「私赤咲鈴！よろしくね！」

赤咲さんはそう言って手を出してくる
ああ握手か…

「よろしく…赤咲さん」

優しく握り互いに握手をする

赤咲さんは微笑んだ後隣に座った

あっという間に女子に囲まれてしまった…やばい美波達からの関節技は覚悟しなければ！あっ…異端審問にはかけられないよね？

「……………！？」

後ろから鋭い視線が突き刺さった…ブリキのようにギチギチと振り返ってみると修羅が二人降臨していた
やっぱり来た…なんでいつもこうなるのさ

「全くアキたら…ウチらよりも早く転入生と仲良くなるんだから」

「なんのことだよ美波…別に僕は」

やばい足が震えて力が入らない
これだから女子は嫌なんだ！

「そうです！明久君には何から何まで吐いてもらいますからね！」

姫路さん！君はなんて恐ろしいことを考えるんだ！くそ…雄二は

「おう…俺は坂本雄二だ」

「ワシは木下秀吉…言っておくが男じゃ」

「……………土屋康太」

くっそ！転入生とのんびり話やがって！僕は危機的状況なのにいい！
姫路さんと美波はどこから取り出したかわからない金属バットを持
っていた

「そんな物で叩かれたら確実にザクロのように何かが飛び出るんだ
けど！？」

「大丈夫よ。綺麗に終わらせてあげるから」

「はい…綺麗にです」

は…はは！あははは！今日で命日か

僕は振り下ろされるバットをただ眺めていた

三問目：早弁と笑顔と突然の誘い

だから嫌なんだよ女子は…なんで僕がこんな目にならなきゃいけないのさ

「痛…」

まだ頭がズキズキと響く包帯越しからでも感じ取れる…はあ…なんか不幸だ

「随分派手にやられたな明久」

雄二は僕の作ったパエリアをもう食べている。いわゆる早弁だ。パエリアを口に運びながら僕は苦笑してみせた

「担任が鉄人か…最悪だよ」

くそ…あの時負けなかったら今頃はこんなことにならなかったのに

ん？試験召喚戦争？

「そうだ！もう一度Aクラスに召喚戦争を挑めば」

「……それは無理」

ムツツリーニはパクつきながら喋った

「ええ…？なんでさ！」

「召喚戦争に負けると3ヶ月は行つことができなくなっている」

雄二は軽い顔をしながらさらりと言った

「さ、3ヶ月！？」

ずしりと3ヶ月がのしかかった。ぐ…3ヶ月かきついなあ

「…もぐ。なあに3ヶ月なんてあつと言う間だ。その間に次の策を考えるさ」

こいつはムカつくけど言っていることは正しいし作戦に関して元神童だけあってかなり戦略的だ

「んぐ。そうだよね…」

パエリアを口に運びボソリと呟いた
雄二は気にしないかのように口を開く

「んで明久。転校生達とはどうだ？」

「どうだって…別に」

「そうか…お前の近くに座ってるから戦力とか知ってるんじゃない
かと思っただがな」

「無理無理…僕は女子は苦手だから」

ブンブンと手を振ると雄二は溜め息をつきながら納得した。あまり
女子のことは信用できない

「む。明久お主何か忘れておらぬか？」

「え…？「明久君ここに居たんですね！」」

振り返って見るとニコニコと笑いながらこっちへ歩いてくる美波と姫路さんが居た

「どうしたの二人共？」

「どうしたもこうしたも「待たせたな吉井達…！」」

美波の言葉を遮るかのように関原君が屋上に上がってきた。関原君は両手に飲み物の缶を持っている

「ありがとう関原君。ごめんね？転入して来たばかりなのに」

「いいや大丈夫だ。校内の中も知っておきたかったしな」

僕らは笑いあって弁当がある場所まで歩いた。あれ？何か忘れてるような気が

「後で来るわ」

あれ？美波達なんで帰ったのかな？

「まあ仕方ないのじゃ」

秀吉は溜め息をつきながらパエリアを口に運んだ。ん？何だろ

「関原君も食べて食べて」

「おう…悪いな…それじゃお言葉に甘えて！」

しばらく弁当を食べていたらまた誰かが屋上へと上がってきたようだ

「あつ…陽哉君！ここにいたのね！」

「ぶほ！！げっ…友里恵」

関原君は盛大に吹き大惨事になってしまった。ちよっ…大丈夫関原君！

「何よげって…酷いなー」

ぶすつとふてくされる新野さんを見捨てるかのように関原君はまたパエリアを口に含んだ

「うめえ…！」

「陽哉君の馬鹿ー！」

「ぐふああ！」

綺麗な跳び蹴りが炸裂して関原君は吹き飛ばされた。おお…綺麗な曲線を描いてる

「全く…」

「あつ…ごめんね！いつもあんな感じなの」

「いつもって…」

まるで霧島さんと雄二みたいだ。いや…あれは雄二が悪いか

「お主らも大変じゃの…」

「うん…でも慣れてるから」

赤咲さんは苦笑しながら視線をパエリアへと移した。赤咲さんの目がキラキラと光っていた

「凄い…パエリアだ！誰が作ったんですか！？」

「僕だけど…」

おずおずと手を挙げると尊敬の眼差しが突き刺さった。う…

「凄い！パエリアが作れるなんて…憧れるなあ」

「…はは。ちょっと照れるな」

女の子から褒められるなんて人生で今日が初めてだ

「凄いなあ…食べてみてもいいかな？」

「うん…味は保証できないけど」

赤咲さんはスツと口に入れた。女子にはきついかな？

「美味しい…美味しいよ吉井君！」

凄く幸せそうな顔をしながらこっちの方を振り返ったので目を逸らしながら手を横に振りながら笑った

「私もアッキーが作ったパエリア食べるわ！」

「私も！」

「みんな僕のことは明久でいいよ」

別に吉井君でもいいんだけどまあこっちの方が呼びやすいし

「じゃあ俺のことは陽哉って呼んでくれ！」

「うん。よろしく陽哉…じゃあ僕はちょっと用があるから。みんなは食べてて」

急ぐように屋上から降りていった。あまり関わらないようにしなくちゃ

崩れる前に

「はあ…疲れたなあ…」

教室に帰って教科書を開きながら一つ溜め息

「……あんな喜んでくれた顔…初めて見た」

美味しいと言ってどんどん食べてくれた赤咲さん達…言葉には嘘がないくらい純粹さがあつた

「僕は何に怯えてるのかな…」

じつと自分の手の平を眺めながら軽く苦笑した。考えてもわからないことを考えるなんて今日はどうかしてるよほんと…

「溜め息ばかりついてても埒があかない。勉強を少しでもやろう」

いざ再開しようとした時、さっきのように教科書に影が差した

誰だろうと振り返ってみたら案の定あの二人だ

「アキ…ちよつといい?」

「何二人共?相談?」

「違うわよ。約束覚えてるわよね?」

約束?...まてまて。ここで忘れましてと言ったら確実に包帯を巻いてる頭が完全に割れる
よし...ここは

「ああ...プロレスを観に行くんだったよね?」

「どうしたらそんな答えがでるんですか?」

呆れられた!?!結構真面目に考えたんだけど...ほら二人と言ったら関節技でしょ?

「全く...今週の日曜日クレープを奢ってくれるっていう約束でしょ」

「はい!?!あれは昨日で終わったんじゃないかったのかよ!」

美波…そんなことしたら僕の食費は吹き飛ぶよ。只でさえ苦労してるのに

「昨日は昨日。約束は約束よ」

その言葉にうなだれていると姫路さんがおずおずと口を開いた

「あの私もいいですか？」

「え…姫路さんも!？」

「はい…観たい映画があるんです」

亀裂が入り僕の心は二つに裂けてしまった。

僕の食費があああ！！

人物紹介（主人公）

よしあきひさ
吉井明久

身長176 / 体重56

クラス：Fクラス

性格：冷静かつ真面目 / 普段は冷たいが本当は優しく馬鹿

趣味：ゲーム、料理、家事、日本史や経済の勉強

好きなもの：ゲームやエロ本、トランプなどなど

嫌いなもの：騙す女や不良、など

原作と違いたいぶ変化しています。

・原作とこの小説の主人公。過去の出来事から女子と仲良くするのを極端に避けている。また雄二達を信じてはいるがあまり本性を出さない

そんな冷たい性格だが仲間を大事にし困ってる人を助ける優しい性格はちゃんと残っている
同性愛者を好まず、恋愛には敏感な方である

周りからは馬鹿や変態、観察処分者の糞野郎と罵倒されているが本人は気にしていない。試験戦争の時や試験を解く時はダテ眼鏡を着ける

・得意科目 苦手は勉強してきたことで特になく日本史や世界史がずば抜けているが、他は平常点
しかしテストでは常に満点を取るが試験戦争の時は何故か低い点を取っている

外見の変化 少し吊り目になっていているが表情は表ではやんわりしている

「だぜ」や「だな」などたまに言葉が雄二のようになる

明久の召喚獣の変化について

制服が赤くなり少し豪華になっている
(神のみぞ知るセカイの制服風)

武器は木刀から銃に変わっている。しかしメイン武器は刀

腕輪を持っていて『凍結』と『ハンドレットパワー』の二つを使用する

しかし使用するたびに操縦者に負荷がかかり体力をかなり消費する

その他

得意料理はパエリアとリゾット

好きな人はおらず常に離れている

暴力を振る奴らは嫌いでFFF団は常に無視している。秀吉を男として見ていて、エロ本には興味を示す心を閉ざしていて雄二達と対立しやすい

オリキャラ
陽哉には興味を示し親友である

同性愛者の久保は大嫌いで容赦ないが、玉野には意外と普通に接しているが女装のことになると容赦ない

四問目：食費とデートとスタンガン

「何を好んで女の子に奢らなきゃならないんだ」

口を尖らせながら、今はキッチンにいる。何をするのかは凄く簡単で朝食だ…というより朝食になるのかこれ

目の前にはカップ麺…そして包丁がある
えっと真つ二つに切って…これは夕食用として

「はあ…バイトやらないといけないかな…」

今日は恐らく出費が厳しい…特に二人となれば…軽く諭吉が飛びそう
うだ。はあ…本当に朝から不幸だ

噴水広場集合か…いかにもカップルらしいね。まああの二人だからそういうシチュエーションは期待されないししたくないかな。別に二人が嫌いということではなくてただ変な勘違いはされたくないだけ。特に雄二達には

「うーケチりたいのは山々なんだけど…流石に駄目だよな」

こういうことは男がやらないといけないから

少しばかり歩いてると姫路さんが既に待っていた。流石は姫路さんだ。やっぱり賢いや…腐女子なのは気にせず

「おはよう姫路さん」

「おはようございます明久君。今日も良いお天気ですね」

ニコツと笑う姫路さんに苦笑ながら周りを見る。へえ…やっぱりカップルが多いな

「何ボーとしてるのよアキ！」

「…ん？」

振り返ってみると美波がニコニコと笑っていた

「君には食費を失う気持ちがわからないだろうね」

「何のことよ？」

美波はそのまま姫路さんの方へ歩いて行き楽しそうに会話していた。

「おはよう瑞希！その服可愛いわね！」

「おはようございます美波ちゃん。でもこの服を選んでいて時間が掛かっちゃいました」

「ウチもよ。ふう…去年着ていたのがまだ着れてラッキー！」

「へえ…それは胸が発達しな「忘れなさい！今の言葉を撤回しなさい！」にぎゃああ！」

関節があ！右足関節がメキメキと砕け…うゝ あああ！痛ええええ！

「……見える！」

「む、ムツツリーニ…何やってるの…」

ムツツリーニはキリッとした顔でこういい放った

「自主トレ」

どんな自主トレだよ…

side陽哉

朝…なんて残虐なんだ

「起ーきて陽哉くーん」

それは天使のようなささやき声にはほど遠い…悪魔のささやき

「……………！」

素早く横へ抜け出しスタンと着地…ふう相変わらず危ない格好しているささやきの張本人を見る

「相変わらずだな…お前は」

下着だけって…いやマジで危ない…すげえ危ない

普通なら理性が吹き飛ぶくらいこいつはいいプロポーションなんだ。
俺は毎日こつだから慣れている

頬は若干赤いがな…

「だって…陽哉君が襲ってくれないんだもん」

「ば 馬鹿言つな！なんでお前を襲わなきゃならないんだよ！」

普通なら『なかなか起きてくれない』だろ！？こいつは思考回路がおかしいのか！？

「え…？別に私はいつでも準備OKだよ？」

だ、駄目だ。こいつ恥じらいつてもんはないのか！？

「あのなあ…俺はお前と添い寝しないし…だいいち彼氏でもない」

「またまた！本当は胸を早く揉みたいんだよね？」

「爆弾発言もほどほどにしろ！な！？近い！近い！」

こいついつの間にか目の前に…当たってるって！

「陽哉君…私じゃ駄目なの？」

「え…？べ、別にそう言ってる訳じゃなくてさ」

ぐう…涙目と上目使いは反則だろ…正直可愛いんだが…

「やった　！！じゃあ早速！」

「ばーズボンずらすなあああ！童貞をやるつもりはないんだよ！！」

「またまた」

「いい加減にしろ」

俺の平和的な朝はいつの日になるやら

side 明久

「おいおい…これはやばいよ…」

ちよつと待ってくれ…今日に限ってなんでこんなに高いのさ!! スター来日? 知らないよ! 僕を殺す気!?

「今日はアキが選んでいいわよ」

「…本当?」

そう言えば先週は二人が選んで恋愛者を観たんだっけ？別に嫌いではないけどカップルが多くて…ちょっと耐えられなかったな。うーんSFとかいいよなあ…あ。でも二人には荷が重いよな

「…諦める明久」

しばし唸っているとあいつ…雄二が手錠を付けて霧島さんと一緒に現れた

「男とは無力だ…」

苦しそうに呟く雄二。わかるよ雄二…だけど霧島さんと付き合うつていう約束だから僕は止めることはできない。というか雄二。それ昨日の台詞だよ

「…雄二どれが観たい？」

「俺の望みは…叶えられるのか？」

確かにそうだ…僕だって早く自由になりたいさ。今頃…家でゲームする予定だったのに

霧島さんは無視するかのようにはポスターを見た。ん？なんかヤバそうだ

「……じゃあ『愛を僕は叫びたい』」

「ちょっと待て！8時間20分もあるぞ！」

「二回観る」

「16時間40分も座ってられるか！！」

待て雄二！これは昨日と同じ…

「退屈なら寝てていい」

「待て翔子…あべらあぐうああ！！」

スタンガンで一瞬で眠りについた雄二を哀れんだ目で僕は見ながら
手を合わせた

霧島さん…君は末に怖いよ

「はつきり意志が伝えられる人って羨ましいです!」

「憧れちゃうよね」

君達…お前達はあれのどこがいいんだ…

四問目：食費とデートとスタンガン？（前書き）

吉井明久のみんなに質問コーナー！

明久『よい子のみんな吉井明久の質問コーナーへようこそ～。ここでは僕がこの小説のみんなにむちゃぶりな質問をしていくコーナーだよ～』

よし早速いつてみよう！

今日はこの人！』

姫路瑞希「え？ここ何処ですか？」

やあ姫路さん。質問コーナーへようこそ

「明久君！？これは一体」

では質問いくよ～

「へ！？あ、はい！」

Q 姫路さんの得意料理（殺人兵器）は何？

「得意料理ですか？そうですね…あつハンバーグです！少し酸味を加える為に『しゅくりょく！』あの明久君？」

質問ありがとう姫路さん。ではバイバーイ！

「あの私まだ内容を ひゃああああ」

危険な回答をした方は紐無しバンジーで空から地上へ帰ってもらいまーす！

「 酷いです明久君 ！」

次回は誰でしょう！？お楽しみに！

四問目：食費とデートとスタンガン？

「…っはー」

映画館から出て缶コーヒーを買う。うん…この苦さ結構好きなんだよね

姫路さん達は映画を観ている…まあ恋愛者だから僕はこうして抜け出して来たんだけど…

「この後どうしようか…」

まずは後ろにいる清水さんを排除して…昼飯だよな…うーん。

缶コーヒーを飲みながらソファーに座った。立っていても仕方ないし…

「でも美波達にクレール奢らなきゃな」

「放しなさい！この豚野…きゃん！」

清水さんの額にデコピンを炸裂させた後素早く気絶させた。まあ明

日には気がついてるだろう

少し考えに更けていると見知った顔が僕に気づき近づいてきた

「吉井君〜！」

「赤咲さん？」

「隣り座るね？」

赤咲さんは微笑みながら隣りに座った。赤咲さんの格好はパーカーとミニスカートと言った女性らしい格好だ
赤咲さんはにこにこしながらこっちを見ている。ああ…これは離れた方がいいな

「吉井君…今日はどうしてここにいるの？」

普段はポニーテールだが今日はおろしているせいか違って見える…

「デートじゃないデートをしてるんだ」

「はへ？」

頭に？マークを浮かべる赤咲さん…はあ 事実を言っているんだけどやっぱりわからないよね

「今は映画が終わるのを待ってるんだ。赤咲さんは？」

「私？うーん 私も彼氏とデートかなあ…」

「へえ」。でも彼氏は一緒じゃないの？」

それが原因だったのか赤咲さんはビクリとしながら必死に顔を逸らした

「えっと…彼氏は…」

そんなに表情を硬くしなくてもいいのに…。あっやっぱり彼氏がないのかな…だったら何で嘘を

「赤咲さん彼氏いないでしょ？」

「うえ！？そ、そんなことないよ…」

「本音を言った方が楽になるけどなあ…」

「ふえ！？本当！？」

赤咲さんは顔を赤くしながら必死にこっちを見つめている

というかこの人流されやすいんだけど！？

「うん。僕は別に言いふらしたりしないしね…」

「本当に？」

「…嘘ついたって何もメリットなんかないでしょ？」

デメリットなら沢山あるけどね…あの人みたいに

「良かったあ…ごめんなさい。本当は彼氏なんていないの」

「やっぱり…」

コーヒートを再び口に含みながらじっと彼女を見た

「で、何で嘘をついたのさ」

「それは…あう」

顔を赤くしながら理由をあれこれ考えている。ん？彼氏いない…僕の所に来た…なるほど

「赤咲さん…告白されたんだね…」

「凄い…なんでわかったの!？」

言っちゃったよ…自分で認めてるね…いや、後からしまったって顔されても…

「実は昨日…同級生から告白を」

「同級生…FFF団の誰かか」

ムツツリーニや秀吉は恋愛にあまり興味を示さない…雄二には霧島さんがいるからあいつらにつながることになる

「それで断ろうとしたんだけど…うまくいかなくて」

「なるほど…その天然さのせいで悪い方に繋がったんだね」

「私、天然じゃないよお…」

涙目で訴えてきても天然は天然だ…言葉使いにそれがでている…

「吉井君の意地悪う…」

「意地悪で結構結構」

赤咲さんは頬をぷくつと膨らませながら下を向いた

「それで彼氏がいるって言っちゃって…今日…映画館前で会いたいって」

「はあ ベターだなそいつも。ふられたならおとなしく引き下がれないのかな…」

しつこい奴らは嫌いだ…いくら振り払ってもしがみつく…惨めとしか言いようがないよ

ソファーから立ち上がって缶を捨てた後静かに歩き出す

これは彼女の問題だ。僕がどうこう言う必要はない…

「……」

あーもう！調子が狂うなあ！素直に言ってくればいいのに

足を止めて彼女の方に振り向く。自分のこういう所がたまに嫌になるよ…

「はあ…僕で良ければ…今日一日彼氏になってあげるよ?」

赤咲さんは俯いていた顔をガバツと上げてこっちをまじまじと見つめてきた

う…ちよつとびっくりしたな

「本当に!?!」

「ちよつ…顔が近いつて…。まあ僕だつてしつこい奴は嫌いだしな。でも今回だけだからね」

手を差し出すと彼女の笑みはとても華やかになった

「…!! ありがとう吉井君!」

そう言つて赤咲さん思い切り抱きついてきた…って公衆の前で何やってるのさ!

「…ふがふうああ! (はなれろおお!)」

美波達に連絡を入れた後…赤咲さんと歩きだした

やれやれ面倒なことになった…明日は異端審問確定だな…

四問目：食費とデートとスタンガン？（前書き）

『僕は異性が好きになれない…だって彼女達は…』

四問目：食費とデートとスタンガン？

「吉井君…これやろうよ！」

「へえ…射撃ゲームか」

赤咲さんの一日彼氏ということで僕らはゲームセンターにきている。
まあ会うまで時間があるし、形から言うしね
少しふれ合ってなるべく彼氏らしいようになる為だ

「私お金だすね！」

「ちょっと待った」

そう言って財布から百円玉を取り出そうと赤咲さんの手を掴んだ

「へ？」

「僕が出すよ…この財布もそういう為に準備した訳だからね」

美波と姫路さんには悪いけどこのお金は赤咲さんの為に使うでしょう

「ごめんね…私のせいで」

「……………」

彼女の言葉を受け流しながら百円玉を入れる。最近のゲームは素晴らしいや…百円玉一つで対戦ができる

「さて…ゲームを始めよう。悲しい気分なんてゲームをやれば消えるさ」

カチャリと赤い銃を手に持ちフツと笑った

「そつだね！よし負けないぞお！」

再び笑顔になった彼女を見た後、画面へと視線を戻す

さて…ゲーマーの力見せてあげるよ！

「ちよっ！？タンマ吉井君！」

「手加減無しだ！」

「酷い　　！！」

ゲームが始まった瞬間……勝敗は見えていた。まあ僕に射撃ゲームで勝つなんてまず無理だ

プレイと同時に銃で画面に映されている赤咲さんを狙う

最初は手加減しようと一秒で二発打っていくことにしたんだけど…

何かスイッチが入ったのか気づけば一秒で二十発打っていた…勿論赤咲さんは打たれて反撃できない

まさに鬼畜と呼ぶにふさわしいね

「もう一回！もう一回やろっよ！」

「惨めになるだけだよ？」

「うっ…今度は負けないよ！」

なかなか挑戦的じゃないか…なら僕だって容赦はしない！

「喰らえ！秘技乱れ桜あああ！」

「ふええ！？攻撃が見えないよおお！」

WIN

画面に映し出された三文字を見て鋭く笑う僕と悔しい顔をしながらも笑う赤咲さん

ゲームはやっぱり素晴らしい…交流が深まる

「楽しかったね…吉井君ゲーム強すぎだよお…」

「僕はゲーマーだからね。あらゆるゲームを攻略しているんだ」

う…何かどこかの落とし神とセリフがかぶったような。うん気にするな…

「あはは…羨ましいなあ。」

「…僕からしたら君の家事スキルが羨ましいよ」

「そうだね…」

よしいい感じだ。後はこの関係をこのままキープして…

「ねえ吉井君…」

「何かな？」

赤咲さんはにこりと笑って僕の手を握った…え？ちよっ！わわわ

「もっと吉井君のこと知りたいな…」

「…!？」

な、何だこのイベント！？想定外だぞ!？

落ち着け…まずは呼吸を整えて…

「駄目…かな？」

赤咲さんは目を潤ませながらこっちを見つめる。あせるな…冷静に彼女に意志を伝えなきゃ

「あ、当たり前だよ。僕は詳しく自分のことを言うつもりはないし…そ、それに手を握られたって何もしないよ?…だって僕は君のことは好きになれないから」

赤咲さんはその言葉に打たれたような反応したがすぐに笑った

「そうなんだ……でもありがとう!」

赤咲さんの言葉にピクツと反応しまじまじと彼女を見つめた

いやだって…普通はあんなこと言われたら誰だって落ち込むはずだ

「…ふられたんだぞ？悲しいんじゃないのか？」

「うん。だって吉井君は吉井君だから。吉井君が嫌ならすんなり引くよ私」

その言葉はまるで鋭い針が突き刺さるような痛みがした…そうか…僕もその方が有り難い

でも…これだけは伝えないとね

「…でも赤咲さん。ちゃんと自分の気持ちを伝えなきゃ駄目だよ？」

ニコリと優しくそして切なく微笑むと彼女は元気よく頷き離れて行った

一日彼氏はお終い…彼女との関係もこれで終わりだ…

「でも…僕は」

さっき握られた手の平を眺める…僕はどこかで求めてる気がする

…いや

「気のせいか」

彼女の後ろ姿を見送った後、軽く微笑みゲームセンターに戻って行った

翌日

雄二はボロボロになりながらみかん箱に突っ伏していた…
ドンマイ雄二…

赤咲さんとはあの出来事以来普通に話している
まあ話しているっても友人関係としてね

赤咲さんはあの後ちゃんと断ったらしい。全く…最初から意志が強ければ良かったのに…おかげでこっちは振り回されて大変だったよ

で

僕は今、姫路さんと美波に詰め寄られている

まあ抜け出した訳だしそりゃ怒るのはわかるけど…

「明久君酷いです！」

「そうよ！罰として来週はパスタと映画よ！」

「ちょっと待ったああ！それはあまりにも理不尽……ぐあああ腕がああ」

僕の不幸な朝は相変わらずだ…

五問目：朝食と決まりと月夜

ふんわりと優しい光が部屋に照らされたことで僕は今の時間帯に気がついた

「もう朝か…」

手に持っていたゲームのコントローラーを置き外を眺める…太陽が輝きさつきまで暗かった空は青く、雲も浮いている

時計を見るとその針は6時を示していた。どうやら僕は7時間以上ゲームをやっていたのか…面白いから睡眠なんか取る暇無かったよ

「まあ…眠らないから大丈夫だけど」

理由は鉄人にある…20時から朝までずっとゲームをして授業中眠っていたら案の定鉄人になりしごかれ…以来眠れないという状態になってしまった

まあ僕にとっては好都合だし…別にきつくもない。僕だけに備わっているゲームをするためのスキルだ！

このPSSのゲームは面白いな…恋愛、アクション、推理、コメディ…とジャンルは様々でどれも夢中になってしまう。今日帰ったら積みゲーになっている恋愛とアクションをやらないと

「まあ…今は朝食を作らなきゃな」

最近バイトを始めたんだ。結構自給がよくて土日を設定している…平日だと自由時間が減るからだ

その店長がとても気前よく…ゲームをわかってくれていて…僕にとっては師匠のような存在にあたる

ゲームは最高の文化だ！これほど素晴らしいものは存在しない！

うん？桂木とかぶっている？まあ中の人と同じだから…仕方ないさ

「頂きます」

今日の朝食はご飯にみそ汁、そして焼き鮭といった定番の朝食だ

ご飯を口に含み焼き鮭をパクリと食べる

うーん…この塩加減とご飯の質…とても美味い…
これは定番の朝食確定だね

「…このみそ汁もいい味出してる…やっぱり豆腐が一番だ」

明日は洋風にしようか…考えるだけで楽しみだ

「じいちゃん」

食器を手早く洗ってからすぐに弁当に作っておいたものを詰める。

今日のイチオシはグラタンだ…うーんいい香りだよ

弁当を作り終えたらテレビを付けて経済について確認する

これは必ず僕がやることの一つだ

なるほど…最近は物価の上昇が激しいな…うん？

「おおお！」

ガタンと椅子を倒しテレビにすがる

なんてことだ！『君に恋して』の最新作が発売だと！？日付日付！
値段値段！

「これだからゲームは最高なんだ…！」

マンションから出て学園に向かう…勿論ゲームをやっている

僕は登下校、家では基本的にゲームをする。沢山あるからどんどんやらなきゃ…

それに登下校なら誰にも文句言われないし時間を合わせればゆつくりと自然の風に包まれながら有意義にできるしね

「とりあえずー！４ＤＳでしょ！ＰＮＰでしょー！」

これが僕の必須アイテムだ！ちなみに鉄人との出来事から上手く隠している

「とりあえず今日も遊ぶぞー！」

朝食を作り、経済を確認し、ゲームを沢山する

これが僕の1日の決まりだ！さあ！邪魔できるならやってみろ！

「……………どいてくださいー！！！」

「え？っわあああ」

振り向いた突如いきなり女性とぶつかり地面に尻餅をついた…朝から不幸だ…

「痛たた…っ あああ！僕の…ゲームがああ！」

さっきの衝撃でPNPが吹き飛び見事に地面に衝突…終わった

「終わった…うつうつ…誰だああ！」

「ごめんなさい！」

素早く相手も起き上がりペコリと頭を下げた

…この人は確か

「君…月夜さん？」

「え？吉井さん！？」

月夜さんは驚いたように目をパチクリさせている…

「……はー！ごめんなさい！ちょっと急いでるんですー！」

月夜さんはすぐに立ち上がりこっちへ走って…うわああ

「ぐふう！」

突撃され中を舞って僕は地面に激突した

痛っ…な…なんて馬鹿力だ…

月夜さんは無視するかのようになだだだた走り去っていった

なんて奴だ！……

ゲームは壊れる…突き飛ばされる…うう最悪な朝だ

「はあ……仕方ない4DSだけでも…

うっ あいああ！？DSがああああ！」

ぐ…さっきの激突で折れたのか…僕の僕の

ゲームがあ…

「幸せな朝があああ！」

「「ビクッ！」」

はは…めげないめげないぞ！

「よし今から新しいのを買いにいこう!」

そんなもってこれとこれをクリアーしなくては

ふ…はは

「はははは!」

学園に向かっていた足は回れ右をして
ゲームショップへと向かった

「待ってる!僕のゲームウウ!はははははは!」

六問目：説教と妄想少女と打倒玉野（前書き）

吉井明久のみんなに質問コーナー！

ようこそみなさん！今日もいつてみよー！

今日の餌食…ゲフン…ゲストはこの方！

赤咲鈴「凄ーい！ここ本当に雲の上なんだ！」

ようこそ鈴。さっそく質問にいつてみよう！

鈴「オー！」

では質問です

Q 鈴の好きなタイプって誰かな？

「ふえ！？…そ、それは…

明久君みたいな人 / /

はいさようなら

鈴「ひゃああああ！酷いー」

全く諦めたんじゃないのか…そんなこと言ったらFFFF団の餌食になってしまうよ

オホン…次回は誰でしょう？

お楽しみに！

六問目：説教と妄想少女と打倒玉野

ため息をつくとき幸せが逃げる…ごもつともだ

なんせ僕は…ゲームショップに行ったことで遅刻し…鉄人にしごかれた後、軽いため息をついたらいきなり転んで4DSが砕けたからだ

せっかく…せっかく買ったのにいい！

あのアイアンマンめがあああ！

「くっそ！…また買い直した…しかも来週くらいだから…このソフトとはしばらくお別れか…うっ」

それにしてもあのアイアンマン本当に手加減がないな…僕はただゲームショップに行って遅れただけなのになんだよ…このでかいたんこぶ

はあ…もういいや。復讐なんて馬鹿馬鹿しいし、テストで見返して

やるか

「あら…おはよう吉井君」

廊下を歩いていたら現国の竹内と出会った…この人アニメのバカテスだと結構美人だよな…まあどうでもいいことだが

「…？今何か言った？」

「いえ…それより次の授業って僕らのクラスですよね？」

竹内先生は首を傾げながら「そうだけど」と言った。よし…これはチャンスだな

「そうですか。ちょっと確認しておきたかったので」

一礼してからすぐに歩き出す。竹内先生はニコニコと見送っていた

笑顔か…そんなもの作りでしかない…

相変わらずみすぼらしいな…

教室をじっと睨みながら扉に手を掛ける。そのままガラリと開けて中に入る

誰もいない…

「どうしたんだろ？」

「おはっよう!」

不意に後ろから声をかけられ素早く振り向いた

そこにはニコニコしながら茶髪のポニーテールと赤いクリアレッドが印象的な彼女がいた

「なんだ…鈴か」

「なんだ…って酷いなー明久君」

むくれる彼女を軽く笑い辺りを見回した

「みんなは何処?」

「あーそのことなんだけどねー」

『坂本を追えー！』

『野郎…朝から霧島さんとイチヤイチャしやがって』

『『関原も許さん！』』

こんな感じ」

「ああ…」

いつもの風景に納得しながらおなじみのみかん箱の前座った
はあ……やっぱり居心地悪いな

「おはようございます明久君」

「おはようアキ」

「おはようなのじゃ」

三人が教室に戻ってきたのを軽く確認しすぐに教科書を開いた

「明久君で勉強家なんだね！」

鈴がじつとのぞき込んでくる。ちなみに今は現国を勉強している

「別に…ただあいつみたいに異端審問とかいう馬鹿馬鹿しいことよりは断然マシだからね」

「あはは…そうだね。私もあーいうのは苦手かな」

数十秒もたたないうちに叫び声が聞こえたのは言うまでもない

さっきから気になってるんだけど

「
」

僕…凄く見つめられてないかな？いや……姫路さんや美波とかのじやなくて…なんというか

むず痒いような視線だ。

ギギギとブリキのように振り向いて見ると…

「
……」

月夜さんがじっと見つめてきている…な、なんだ…僕何かしたっけ？

s i d e 月夜

吉井さんとかっこいいですね…はっ…こっちを見る！

どうでしょう！

『月夜さん…わからない所があったら教えてあげるよ』

『え…？いいんですか！？』

『ああ…勿論…体でね』

ってなっちゃったらしましょ！

（な、なんだ…凄く寒気が）

吉井君はすぐに黒板の方を向いて勉強に集中しています…

吉井君：かつこいいですう…初めて会った時から凄く気になってたんですけど…

そつえば私…まだまともに話してません…

「じゃあこの問題を…吉井君！」

竹内先生は吉井君を指名して…吉井君はすくりと立ち上がりました

うわあ…スラリとした体系…そして眼鏡をかけている吉井君はますます素敵です

「あ……僕がやりますよ」

竹内先生は黒板を消そうとしていたのですが吉井君が率先して竹内先生の手に自分の手…をを！？

「あら……ありがとう吉井君」

「いえ…」

『吉井君て背が大きいんですね…』

『先生は大きい人が好みですか？』

『え…？ひゃあ…駄目ですよ…生徒と教師じゃ…』

『先生…愛に年の差なんて関係ありませんよ…』

『吉井君／＼／』

『いいですか？先生』

『承認します／＼』

きつとこんな展開が…

「はっ」

「！？光奈ちゃん…ど、どうしたの！？」

『『吉井め…』』

『明久君…お話ししようね』

『アキ…竹内先生と』

「わああ！友里恵ちゃん！Fクラスがカオスに…」

「やめろ！友里恵！俺はお前なんかファーストをやるつもりはない！」

「陽哉君」

「うわああ！」

「…カオスだ…」

六問目：説教と妄想少女と打倒玉野？

『これより異端審問を行う』

『イエスマム』

「何がイエスマムだ…頭悪いのに変な単語覚えやがって」

フードをかぶり陽哉と雄二を裁いているみんなに呆れながら教科書な意識をうつした

みんなは僕と竹内先生が何かあると思っっているのか…？はあ…本当に頭がおかしいな

僕が竹内先生に接しているのはこれからの試験の為に恋愛感情など持ちたくもないよ

「相変わらずね…あいつら」

「はい。元気いっぱいですね」

何で二人が裁かれているのかは単純だ

授業中、童貞を必死に守っていた陽哉…、

姫路さんと話し少し雰囲気がいだけで目をつけられた雄二

まあいつものことだ…

「明久君ー！勉強教えて」

「何だよ鈴…僕は今忙しいんだけど…」

は！？近い！寄るなあああ！

「私だって試験でいい点を取ってみんなを助けてあげるんだから！」

ずっと近寄って顔のギリギリまでいる…うつ…

「あ……………うつ／＼」

くそ…なんでこんなに押されるのが弱いんだよ僕は！

「仕方ないなあ…ちょっとだけだからね」

「ありがとうー！」

「だあああ！抱きつくなああ！」

く…胸を押し付けてきやがって…くそ悪魔だ

「で、何を勉強したいのさ」

鈴を振り払い眼鏡をくいつとあげてじつと見る
鈴はニコニコとしながらいつのまにか持ってた鞆から教科書を取り出した

ま、まさか！？

「勿論：保健：体育！」

その瞬間：全ての視線が集まった：まずい！

「ダッシュ！」

『『吉井を殺せええええ！』』

『吉井を八つ裂きに！』

『坂本をミンチに!』

『関原を粉々にいい!』

くそ!!非異端者が!!理不尽にも程があるだろおお!!!!

「吉井さん…はう／＼」

side 光奈

「鈴ちゃん鈴ちゃん」

「何？光奈ちゃん」

私はみんながいなくなった後、のほんと座っている光奈ちゃんに話しかけました

理由は勿論…

「吉井さんて勉強教えるの上手？」

「うん！凄く上手くて…はわ…／／」

おお…鈴ちゃんが真っ赤になりましたよ…

勉強が上手いんですか…

『さあ鈴…たつぷりと教えてあげるよ』

『ああ…明久君…そこは』

『ここがわからないんだろ？』

『ひゃあ…もっと実用的に教えてほしいな…』

『へえ…なら今日は寝かさないぞ？』

「えへ…あへへ／＼」

あっ……ついヨダレが…

「光奈ちゃ…ん？」

ああ…吉井さんと他の方を見るとついよからぬことを妄想してしま
いますう…

鈴ちゃんは吉井さんに告白をしてふられたと言っていました…

私はどうなるんでしょうね…

こんな私じゃ…きっと

side 明久

「で、こうなるんだ…」

頬さすりながらじつと周りを見渡す

何かを妄想している月夜さん…地面に埋まっているみんな

はあ……改めて思っけど普通じゃないな……このクラス

「なるほど…明久にしては凄いな」

「実にわかりやすいのじゃ」

「……教師並み」

「おお！つまりこうか！」

「そう…凄いじゃないか陽哉！」

僕は竹内先生の授業終了後、軽く復習していた。まあ僕がみんなに教える立場なんだけど…

陽哉は理解が早い…流石同士だ…雄二達も頷きながらペンを走らせる

僕は軽くノートをまとめてみんなに説明している…次は…鉄人の授業か…ちょうどいいや

「じゃあノート置いておくから…」

「ん？明久どこに行くんだ？」

雄二が立ち上がって興味深そうな顔をしている…まあいいか

「ちょっとね…雄二も来る？」

「いいのか？内密なことじゃねーのかよ」

「ああ。雄二には話しておきたいしね」

ニヤリと笑うと雄二は少し警戒はしていたけどフツと笑った

「鉄人の授業がサボれるなら行かせてもらうか」

僕と雄二はガラリとドアを開ける。その時、月夜さんが目に入った

が彼女はすぐに目を逸らした

なるほどな…

「明久君何処に行くんですか？」

「西村先生の授業をサボる気？」

出る前に近くにいた二人に呼び止められた…はあ…まあいいか

「ちょっとね…」

それだけ言っつてすぐに教室から出て行く。君らには縁も縁もないことだ

「で、何を考えているんだ明久」

雄二の言葉にピタリと足を止め振り返る

「そのうちわかる」

「ほお…俺らを信用していないのか？」

「挑発しようとしたって無駄だぜ雄二？なんなら帰ってもいいんだよ？」

「…………ちっ…」

雄二の悔しそうな反応にニヤリと笑いながら再び歩き出す
僕らが向かっているのは

竹内先生の所だ…

「気が変わったよ雄二…」

「あ？」

「何を考えているのか話してやるよ……」

そこで一度言葉を切って雄二をじっと見る……奴は黙りながらこちら

を見ている

。……さて少しからかったことだし本題に入ろうか

「僕はDクラスと試験召喚戦争を起こす」

戦略的な元神童か…

だが、そんなの頼りにするつもりはない

この試験召喚戦争…僕が勝利へ導いてやる

六問目：説教と妄想少女と打倒玉野？

「Dクラスに宣戦布告だと？」

雄二は動揺しているのか言葉が強くなっていた
僕はそれをニヤリと笑い口を開く

「そうさ。Dクラスと試験召喚戦争をするのさ」

「アッキー達遅いね」

「ああ…西村大分切れているんだが…」

みんなも硬直している…それほど今の西村はやばい…明久…雄二

死ぬなよ？

side 明久

「お前はついに馬鹿を極めたか？俺達は召喚戦争に負けて3ヶ月は

できないはずだ」

思った通りの反応…無理ないか…普通なら誰でもそう考える

だが

「それがもしできると言ったら？」

「何？」

伊達眼鏡を外しじつと雄二を見る。雄二は僕を睨みつけた

「お前…何をした」

「…ババアと交渉したのさ」

迷いなどない僕の言葉に雄二は目を見開いた…そう…試験召喚戦争の鍵を握ってるのはあのカラルババアだ

「だが一体どうやって…まさかお前」

「流石は神童…か。そうさ 僕が竹内先生と接していたのには理由があるのさ」

廊下を再び歩き出しながら窓を眺める…

「…確か竹内は…カラルの研究アシストをしたと聞いたことが…まさか！」

「そうだ。カラルを一番説得できるのは竹内…だから僕は彼女と友好的に接しカラルに挽回のチャンスを仕掛けさせた」

そしてカラルは見事に引っかかってくれたよ。竹内は大事なアシスト…だからいつもお世話になっている竹内に下手な態度はとれない
そして僕は竹内にどんな奴かを聞いた…だからババアはすでに僕の手の中にあるのさ

「明久…お前…」

「悪趣味だと言われても構わない…だが僕だってあの設備はうんざりだ…」

「なるほどな…ならこの試験召喚戦争…お前が始めたんだ。主導権をくれてやる…」

「素直に受け取っておくよ雄二」

雄二は少しため息をつきながら指を指した

「今回はお前が指揮を勤めろ！ただし負けは許さん」

「ふ…いいよ雄二…君は代表だ。王は座って待ってな」

互いにニヤリと薄く笑いガツと腕を叩き合った

「これから僕は竹内先生に会う。雄二は教室に帰って須川に宣戦布告をやらせるんだ」

「へいへい。わかりましたよリーダー」

雄二はくるりと方向転換し教室へ戻って行く。馬鹿め…今の状況をわかっているのかあいつは

『明久ああああ！』

甲高い悲鳴声が聞こえ僕は腹を押さえながら笑いをこらえた

いかんいかん…ついおかしすぎて

「さあ……全て整った…」

後は奴を攻略すれば必ず勝てる…だがあいつは常識を越えている…

「どうする…下手に近づけば命取りだ…」

顎に手を当て考えながら職員室へと向かう…

これが終わったら学食で今日は済ませよう

大方…雄二が仕返しを企ててるだろうしね

「吉井君こっち!こっち!」

「竹内先生?」

おかしいな…職員室に居るはずじゃ…

竹内はにこにこ笑いながら近づいてくる…竹内の所へ訪れたのは
Dクラスに勝つ為なんだけど

「…先生?どうし……ん……!?!?」

な、なんだ!?!何が起きた…んだ?

「
…あ
」

「吉井君…」

竹内先生に抱きつかれていたことに気づいたのは数秒してからだった

「あ
… / /
」

何がどうなってるの！？…う…胸が当たって

「先生？ / /
」

「…！？あ…ごめんなさい！…早く補習しましょう！ / /
」

やばい…まさか教師にフラグ立てちゃった？

「……／／／」

熱くなった頬をぺしぺしと叩きながら僕は竹内先生と今は開いている補習室へと向かった

何か問題が発生しないといいんだけどね…

「あ…吉井君」

「はい……」

竹内先生は振り返って笑みをこぼしている…く、また顔が熱くなる

「学食一緒に食べようか？」

「はい？………？」

…まずい。フラグが完全しつつある…

雄二達にバレたら…くそつ最悪な結果しか思い浮かばないや…

「……えっとー」

「あつ！また私ったら／＼」

どうするんだ…こんな状態じゃ…切り札となる月夜さんと仲良くて
きるかわからない…

頭をかきながらとりあえず補習室へと向かった

六問目：説教と妄想少女と打倒玉野？

「……よし。次は彼女だ」

補習室から出た僕は教科書を手に持ちスタスタと廊下を歩いていった。まず竹内に深く入りすぎたのはミスだった……なんとか説得したが……雄二達に知られてはないかな？

「月夜さんとは徐々に仲良くなるつもりだったが……考えを変えよう」

開戦は午後だ……それまでに彼女と仲良くなれるかわからない……というより補習に時間を使いすぎたようだ……これじゃあ間に合わない

そこで作戦を変更する。今回Dクラスとは現国で勝負するつもりだ。奴らに指導権は与えない……竹内とはババア攻略の為に……だからついでだから現国にしようとなったわけさ

月夜さんは現国を一番の主力としている……だからこそ今回は彼女がキーマンなんだ

「問題は…どうやって彼女とタッグを組むかだ…」

一気に終わらせる為に玉野美紀を攻略しないといけない。鈴でも良
いんだけど鈴はあいにく現国を主力としていない。だから月夜さん
とタッグを組み美紀にぶつける

僕が美紀と戦えば確実に負ける…何故なら彼女は…

「試験召喚をしてもリアルで攻撃を仕掛けてくる…」

トラウマだ…彼女がDクラスで一番切り札の位置にいる…なら僕が
戦えないなら月夜さんに戦ってもらうしかない

美紀の奴…僕が言ったこと絶対守っていないはずだからね…

「月夜さんと上手くいけば勝利のルートは見えたも同然なんだけど
なあ」

『やあ月夜さん…』

『吉井さん？』

『…なんでもない』

駄目だ。ちまちまやってたら僕は必ず近づくのをやめてしまうよ…
おのれ…なんで現国は月夜さんだけなんだあああ！

陽哉は数学なんだが…教師は変えないつもりだ…つまり…Dクラスの教室へ一気に押し入る！そこは考えてある。月夜さん以外をみんな戦わせる

隊長なんか関係ない…独自行動だ！

教師には数学の船越、化学の布施を用意して…竹内は僕が誘導する

今回、陽哉には好きに暴れてもらおうとしよう

「後は月夜さんか……………仕方ない。これだけは本当にしたくなかったけど」

落とし神のように彼女を一瞬で攻略する！……………そうと決まれば実行あるのみだ

『ガラリ』

「さーて作戦を実行だ！……………ん？」

周りはしんと静かだ……………おかしいな……………宣戦布告は……………なんだやってくれているじゃないか。証拠に須川はボロボロだよ……………ならなんでみんなはそんなに怯えて！

「鉄人…」

「Welcome」

あ

最悪な計算ミスだ…

side陽哉

「明久大丈夫か…？」

俺は腫れた頬を押さえている明久に声をかけた…どうやってたらあんなことになんだよ…まるで虫歯のようにふっくらしている雄二に関しては畳に顔が埋まっていて言葉が出ないぜ…

「痛てえ…あのアイアンマンめ」

「お主もこんなことがあるとわの…」

「……………いつもは真面目」

へえ…明久って色んな性格なんだな…本当に面白い奴だ

「くそ…隠してた鈴の…写真が…」

「何!?!」

「ベストアングルだったんだけどなあ…」

「……………残念すぎる」

「くそ…!西村めえ」

エロに関しては大歓迎だ…ん？変態？違うな…俺や明久、ムツツリ
ーニは紳士だ！！

「…ええ！？明久君いつの間に！／／」

鈴は慌てながらスカートを押さえた…いやなんで押さえる…

「……まあいいか。ムツツリーニ…鈴のをニダース頼むよ」

「………まいどあり」

おお…流石明久だな…？寒気がするのは何故だ…！

「ふええ！？／／」

鈴はワタワタと慌てていて、光奈は何かを妄想しているようだ…友里恵は友里恵で顔を赤くしてるし…雄二は相変わらずだし

「じゃが…明久良いのか？」

「何が…？」

「あの二人のことじゃよ」

二人？…うおおあ！姫路と島田…殺気やばいだろ！？姫路はにこにこ笑いながら釘バット…島田はスティックを持っている。怖い！怖いって！

「明久君…何で鈴ちゃんばかりなんですか？」

「正直に言えば首飛びで勘弁してあげるわ」

おいおい……島田に関しては危ないだろ

だが明久は平然と振り向き彼女達を軽く睨んだ

「勘違いするな。僕は女子は嫌いだ。がエロは好きだ。鈴の写真をかう理由は簡単」

一度言葉を区切りすつと息を吸う

「彼女がグラビア以上の体だからだあああああ！」

才才才才才才才才才才！

周りから拍手が起こる…流石だ明久！俺も感動したぜ！

「は…わわ。あ…う／／／／／」

鈴は真っ赤になり顔から湯気を出しながら俯いている

「お主…色んな意味で凄いの…」

「「orz」」

ん？姫路と島田はどうしたんだ？すげー絶望状態なんだけど…そして雄二…いい加減帰ってこい！じやなきや霧島呼ぶぜ！

「…ん？お前らどうかしたのか？」

早っ！！すぐに復活しやがった…でも木が刺さってるんだが…あ…
若干血が流れてる

「雄二…その姿はなんだよ」

「あ…？お前こそその腫れた頬はなんだ…」

「「はあ…」」

二人は深くため息をつきながら俺達を見た
…？何だその変な目は…

「まあいいや…そろそろ戦争を始める…か」

明久はニヤリと笑いながら雄二を見た

「ああ…じゃあ後は頼んだぞ」

「おい雄二…お前がリーダーたる？」

「何のことやら…」

そう言った後、あいつは前を見るように促した。そこには黒板に凄
い早さで何かを書いている明久がいた

「みんな…この指示の通りに動けば必ず勝てる…」

『でもよ…観察処分者たるあいつ』

『馬鹿に任せて大丈夫か？』

『まさかあいつ…月夜さんを独り占めするきじゃ』

『いや…あいつ女子には興味ないって言ってたし』

などとザワザワと教室が騒がしくなってきた…ん？俺は船越を連れて暴れるか…

下剋上か…面白いじゃん！

「システムデスクが欲しいなら…僕の言う通りに…いらないうらさぐに消えろ」

明久はそう言って教室から出て行った…開戦は午後

みんなの目は本気だ…

六問目：Dクラス戦完結

「えっ…と。ここですよね？」

吉井さんから旧校舎の教室に来るよう呼び出されました。何でしょっ？

『やあ月夜さん…待ってたよ』

『吉井さん…どう…ん…／／』

『可愛い顔だ。もっと近くで見せてよ』

「はわわわ！駄目駄目！そんなことありうる訳ないじゃないですか
！！」

バシバシと頬を叩いてガラリと教室を開きました

「吉井さん…？」

目の前には眼鏡をかけている吉井さんが立ってこちらを見つめています

「待ってたよ…」

え…？

さて…いよいよ開戦の時だ。

みんなもじつと廊下を見つめている。よし…気合い十分だな

「いいかいみんな。作戦は指示した通りだ…勝負は一瞬で決めるつもりだからみんな腹をくくれ！」

『オオオオオオ！』

『Dクラスなんかに負けるか!!』

『そうだ!俺達の力見せてやろうぜ!』

「では先生方よろしく願いします」

三人の教師はこくりと頷く。竹内は上手く誘導する為手を握っている

その隣には肩に抱きつく月夜さんだ。ニコニコとしているが…
まあ大丈夫か

「陽哉!君には援護をお願いする」

陽哉はニツと笑い拳を突き出した

「任せろ！」

よし…後は美紀か…。あいつがどんな手段を考えているかはよくわからないが…そこはどうにかするしかない！

雄二は縄で縛って教室で待機して貰っている

悲鳴が聞こえるが知らんな…

『キーンコーン…』

「来た！みんな突撃だ！」

その言葉と同時に全員が走り出した。相手の教室との距離は近い方がよい。だから…運動神経が良い奴を送り出す！

『『ウオオオオ！』』

「来たぞ！Fクラスの連中だ！！」

へえ…教室前で待機とは…挑発してくれるじゃないか…

だが！！

「さあ！！いけ陽哉！」

「しゃああ！船越先生召喚許可を！」

まず先陣として陽哉を送り一気に戦況をこちらのものにする！

陽哉は船越先生の隣に立ちDクラスを見据える

『承認します！』

「しゃああ！関原陽哉がDクラスの半分と数学で勝負だ！」

「ええええ！？」

陽哉はバツと空中で回転してキーワードを喋った

「サモン！」

サモン（試獣召喚）：この戦争の時に使用する分身を呼び出すキーワード：陽哉の召喚獣は体のあちこちがメカになっている

まあターミネータと言っのがふさわしいかな

関原陽哉 Fクラス
数学 360

『360！っ』

『Aクラス以上じゃないのか!?』

たじろくDクラス…はは…いいぞ。もっと震えさせてやる

「美波!君も続くんだ!」

「わかってるわよ!サモン!」

島田美波 Fクラス

数学 290

『あいつもか!?』

『ちょっと！やばいんじゃない！？』

よし…エンディングが見えた！！

「今だみんな！」

『みんな！吉井達を導け！』

『我らに勝利を！』

『『サモン！』』

Fクラス生徒
数学

100×23人

点数は低いがみんな進化している…まあこれが限界だと思うけどね…

「竹内…ちょっとだけ我慢してください」

「え…？きやあ！」

竹内を抱き上げ月夜と一緒に真ん中を走る…みんなが戦争をしているから堂々と通ることが可能だ！！

『戦死者は補習！』

『ぎゃあああああー！』

後ろでは陽哉にやられたのかDクラス生徒の悲鳴が聞こえた

『お姉様〜!!!』

『いやああ!』

こんな悲鳴も聞こえたがまあ無視しよう
そして月夜…お前は妄想するな

「平賀!覚悟しろ!」

「よ、吉井!？」

さて一人となった平賀…と言っても…

「やっぱりいたか…美紀」

竹内をするりと下ろしてじっと見る。まあまあ…顔を赤くして…さぞかし僕に女装させたいんだろうな

「月夜!」

「月夜光奈がDクラス玉野美紀さんに現国で勝負!」

「続けてFクラス吉井明久が現国で平賀と勝負!」

「何！しまっ……」

遅い平賀！今更何しようが無駄だ！

「「サモン！」」

この勝負……貰った

Dクラス
現代文
平賀源氏
200

VS

Fクラス
現代文
吉井明久
650

Dクラス
現代文
玉野美紀
195

VS

Fクラス
現代文
月夜光奈
320

勝負は一瞬だった…月夜は玉野を一刀両断

僕は平賀を蜂の巣にした

ああ…言い忘れてた…僕さ…自分が指揮をする時は…通常のに戻すんだよね

時は…通常のに戻すんだよね

問題はDクラスに勝つてからだ…

雄二は平賀と話し合い設備は交換無し。
違う条件をした

まあ次のBクラスの為だからね

その後：陽哉や雄二、月夜達はみんなから称えられていた

姫路さんは運動神経が悪いから今回は後ろだった。まあ周りを一掃してたな

でだ、

「離れろおおお！」

「明久君！私頑張ったの！」

美紀が抱きついてきた…女装させない。僕のことをアキちゃんと言

わない

つまり約束を守ってくれた訳だ…正直驚いたが…

「今はもつと酷い！」

胸を押し付けるな！唇をちかづけるなあああ！

「…でね！今度こそ付き合ってください！」

「話をキケエエエ！／＼／」

こいつ剥がしても剥がしてもくつつく！？

「ぬぐああ！」

顔を掴み必死に引き離そうと試みるが…

「明久君！明久君！明久君！明久君！ハア…ハア！／／／」

「…いい加減にしろおおお！」

結局…エンディング後は…バグ発生か

登場人物紹介（オリキャラ）（前書き）

鈴「やったあ！ようやく私達の紹介だね！」

明久「だからと言って抱きつくなああああ／＼／＼！」

登場人物紹介（オリキャラ）

せきはらようや
関原陽哉

身長 175 / 体重 57

クラス：Fクラス

性格：元気かつ優しい

趣味：ゲーム、スポーツ、撮影

好きなもの：ゲームやコーヒー牛乳

嫌いなもの：仲間を傷つける奴、言い訳をする奴、姫路や島田

・普段は優しく元気な少年。エロいことが好きで明久とは似てる面があり特に仲が良い。いつも幼なじみの奇襲を受け苦労している

・得意な教科は数学や科学と言った理数系
Dクラス戦の際に明久が船越や布施を呼んだのも陽哉の為でもあった

召喚獣：ターミネーターに近い。肩にはレーザーガンがあり当たると点数関係なくその部分が溶ける

新野友里恵しんのゆりえ

身長164 / 体重

クラス：Fクラス

性格：明るくクラスのムード約

趣味：陽哉への奇襲、ゲーム、絵を描くこと

好きなもの：ゲーム陽哉、明久の料理などなど

嫌いなもの：FFF団、暴力する人

・とにかく陽哉が大好きな格闘好き。親しい仲間には徒名を付けて呼ぶ。明久の料理が大好きで…今は明久から教わっている
ゲーム好きな為、明久や陽哉達と気が合う

召喚獣：女型ターミネーター 本人よる希望
能力は陽哉と全く同じだが、姿は美しい
。得意な教科は陽哉と違い文系

つきよみな
月夜光奈

身長157 / 体重

クラス：Fクラス

性格：優しく穏やかで、周りを引きつける力がある

趣味：読書、妄想すること、

好きなもの：小説や妄想、明久

嫌いなもの：気持ち悪い人、虫、暴力する人

・見た目は日本人形並みに美しく可愛いがそんな外見から想像もつかないような妄想をする

妄想は危険なレベルばかりで明久の時に關しては手に負えない。しかし普段は一番真面目である。明久に攻略（ここ重要）されたが自分からふっている

召喚獣：大剣を装備したハンティング武装。様々な武器が隠されている為、相手に大きな動揺を与える

得意教科は文系で現国と古典はずば抜けている

あかたきすず
赤咲鈴

身長160 / 体重

クラス：Fクラス

性格：優しく小動物のようにきゅんとしている。とにかく明久を弱愛している

趣味：ゲーム、家事、明久のお世話

好きなもの：ゲーム、UNO、明久

嫌いなもの：暴力する人、騙す人、虫、雄二

・とてもプロポーションが良く天然。明久に一番最初に落とされた女性。

いつも元気で優しいが本当は苦勞していて明久はそれを知っている
ので彼女がついてきても構わない

明久にふられているが諦めたかは不明である

それ以降はポニーテールから神のみぞ知るセカイの長瀬のような髪
型にしている

召喚獣：全く本人と同じ姿で武器は双剣と大砲

得意教科は明久と同じ日本史や世界史である。総合科目においては
姫路よりも高い

腕輪は『マグマ』を使用する

・これから登場するバカテスキャラ達も一部変更点があります

(例) 玉野美紀―明久と認めているが危険なレベルで弱愛している
など

七問目：弁当と仲良し女子と根本を弄って遊ぼー

Dクラス戦が終わってから次の日の朝…

「…すう」

吉井明久は眠っていた。昨日の玉野の一件で相当疲れたのだろう

玉野との格闘は夜まで続いた

自分の家へ連れて行こうとする玉野に明久は何度も殴り飛ばすのだがすぐに起き上がり再び乱戦になった

その時明久はぼそりところかいたのだった

「僕としたことがルートを間違えてしまつとはね」

普通の明久なら口にはしない…だがこの吉井明久は落とし神様のよう
にクールで優しいのだ

「…んん？」

明久は軽く寝返りをうつたのだが、体が上手く回らないことに疑問
を覚えた

何かがいる

「……！」

明久は軽く目を覚まし思い切り掛け布団をはぐった

side 明久

何で彼女がいるんだ…

「は…？」

目の前には倒れたのか軽く涙目になりながら頭をさすっている鈴がいた
普通ならここは慌てるんだけど…あいにく僕にはそんなことができない

「何やってるんだ」

最初に出た言葉はそれだった。

何故こいつが僕の布団の上にいるんだ…

「おはよう明久君！」

「話を逸らすなああ！」

ガシリと頭を挟みグリグリとする

「にゃあああ！痛いよおお！」

ワタワタと暴れるが容赦はしない…ボツキリと話を聞こつじやないか

「待ってよ明久君！」

「……」

不法侵入した奴の言うことなど聞いてられるか
僕はこの『クライマックスヒートスフォー』に夢中だ

使用キャラはオーズしか使っていないけど…

「くう！プロミネンスドロップはいつ見ても最高だ！」

空を見て叫んだ。周りの目なんか気にしない！

今日も青空が満点だ！こういう日はゲームに限る！ははは！

「明久君が…壊れてる」

鈴は遠い目をしているが…まあ気にしない。というか僕は壊れてないけど

「鈴は何でゲームをやらないのさ」

鈴もゲームが好きだ…なら普通はプレイするのが当たり前だろ！

「い、いや…明久君が異常なだけだから」

「は？」

異常？何が異常だ！！僕はただ決められた時間に決められたことをしているだけで…うゝああ！おのれバースタッグめ！目を離れた隙に…

「上等だ！！ゲーマーの力を見せてやる！」

4DSを失って…悲しみに明け暮れていた僕だったが…PNPがあったことを忘れていたよ…ふっ…ははは！

「私先行く…ね」

鈴は何故か顔を引きつらせながら走って行った。何だよあいつ…

さてさて…ここはFクラスの教室…まあ朝から五月蠅い…

そして

「明ひ…ふべ！」

面倒くさい…美紀が突然現れ飛びかかってきたから…あくまでも戦闘防衛として返り討ちにした

「…痛たた」

格好が格好だからスカートがはだけて下着が見えているが…熱烈大歓迎だ…

「……………ブシャアアア！」

ちっ！ムツツリーニは荷が重かったか…

「ちょっと…明久君…女の子を殴ったら駄目だよ？」

「…不法侵」わあああああああああ

あくまでも戦闘防衛しようとしたら鈴は大声を上げた…ぐう耳がああ！

「頭がああ！」

隣では転げ回るみんな…陽哉や雄二もいた

あ、美波達も居たのか

「と、とにかく邪魔するな美紀！僕は今から勉強をするんだ！！」

「…ええ」

そんな顔されたって駄目なもんは駄目………月夜？帰ってこい！妄想世界へ行くなあああ！

「おはようございます………みんなどうしたんですか!?!」

姫路さん教室に入ってくるなり悲鳴を上げた…まあこのorz状態じゃ無理ないか

「おっはよー！あっアッキー！」

続いて入ってきた友里恵は僕を見つけるなりトタトタと近寄ってきた…ああ、あれか

「昨日教えて貰ったことを生かして作ってみたんだよ？」

相づちを打ちながらヒョイとコロッケを口に含む

「ふむ…なかなかクリーミーだ…いい味出してるよ」

「やったああ！」

ガッツポーズを取る友里恵…陽哉君は幸せ者だな…たぶん

「あ、明久君！実は私もお弁当作ってきたんです！」

「姫路さん。これは軽食だけど？」

お弁当って…そんなもの食わされたら確実に殺されるってのに

「良かつたら…食べてく「断る」え？」

「いいか！あくまでも僕が友里恵のコロッケを食べたのは陽哉の為だ！！友里恵は今、僕の元で修行中であって…更には自分に関係しないなら別に構わない！だが僕は女性の弁当は食べない主義だ！！」

ビシリと指を指して言い放つ。つまり友里恵はあくまでも陽哉の為。姫路さんは僕の為…だから僕は断る訳だ

「…そ、そうですか」

「アキ！酷いじゃない！瑞希が折角作ってきたのに」

そんな言葉を見殺ししつつガラリとドアを開ける

「鈴…行くぞ」

「あつ！待ってよ明久君！」

七問目：弁当と仲良し女子と根本を弄って遊ばー？

教室から出て僕は鈴を連れてBクラスに向かっていた…まあ簡単に言えば宣戦布告の為だ

今頃みんなは回復試験を受けてるだろう…さてBクラスの屑代表に会わないとね

「なんで私まで一緒に？」

「決まってるよ」

ガシツと肩を掴み彼女に詰め寄る

「ふえ！？」

優しい目をしながら彼女をじっと見つめる…そう必要なんだ君が

「だって殴ってきた時対応できないだろ？」

「……え……」

「じゃなきゃお前をついて行かせる訳ないだろ？」

鈴はかなり複雑な顔をしながら後ろを向いた。そしてとことと

「きゅー！」

逃げる前にガシリと後ろ襟を掴み引っ張る。全く逃げようだなんていい根性してる

「行ってくれるよね？」

「………はい」

力なく頷く鈴…まあ後から何か奢ってあげよう

「本当に行くの？」

「今更何を言うんだ。当たり前じゃないか」

「で、でも！ここの代表根本君だよ？」

根本…モテない奴、卑怯な奴、関わりたくない奴ワースト一位…ゲームでは一番損な奴だ。だからこそだ

「ああわかってるよ。」

だからあいつをいたぶってやるんだよ!!

「明久君？怖いよ？」

「…鈴。危なくなったらこれを使うんだ」

そう言うってから鈴にクラッカーを渡す

「え…？」

「特製クラッカーだ。使えば一日相手の耳を潰すことができる…まあ兵器だな」

「なっ!？」

ふ…相手が根本ならこちらでもセコくやらせて貰つよ。まあ点数は減らせないがそこは雄二が上手くやるだろう

「…うつ…！ええい！こうなったら意地だああ」

そう言ってから鈴は教室へ突撃していった

いっそ作戦通りだ

「さて、僕は…「あれ？君ってFクラスの吉井君？」な…」

目の前には薄い紫で長い髪をした子と薄い緑色で短髪の子がこっちを覗き込んでいた

まさか…この二人…Bクラスの…

「…そうだけど何だ？」

落ち着け…冷静にしろ…『宣戦布告をします！』駄目だああ！

「え！？宣戦布告？」

「あつ…そう言えば吉井君…ふぐ！」

突出に長い髪の子の口を押さえた…何故かそうしなきゃって思ったんだ

195

「あんた！律子に何して『宣戦布告だと！？ふざけるなあ！』」

やばい！

「「きゃあ！」「」

二人をすぐに耳を塞ぐように押し倒した

『パアアアアン!』

クラッカーの超強烈な音が響き渡り…

「ぐ…!」

こ、鼓膜が!

『ぎゃああ!』

『いてええ!』

ぐ…何も聞こえない…何が起きてるんだ！

「明久君ー！帰ろう！」

「鈴？ぐえ！」

ガシリと掴まれ、引きずられるように僕は教室から離れて行った

「何？今の」

「わからないけど…何か凄い音が」

『ぎゃああー！』

『誰だあ！あんなクッカード鳴らしたのはああ！』

「クッカード？」

『ぐふつ』

（律子！根本君の足元にあるのって…）

（うん。クッカードだね？もしかしてみんなこれに…）

（じゃあ…吉井君が押し倒してきたのは…）

（私達を守る為？）

（（………））

（（／／／／／））

根本side

くそ！Fクラスの野郎…宣戦布告だと？

それにしても何だあの馬鹿でかい音は…おかげで耳がいかれてしまったぞ！

『『根本…』』

何だ？何でこいつらは俺の周りを取り囲んでるんだ

ん？クラッカー？

！？

「なんだこれ！俺か！？俺がお前らが生意気だから使ったのか？」

くそ！こんなもん持ってた記憶ねえ…

「「根本おお！」」

何を言っているのかわからぬまま俺はクラスの奴らから揉みくちやにされてしまった

さては…吉井の野郎か!!

必ず復讐して…ぐふあ！

七問目：弁当と仲良し少女と根本を弄って遊ば　？（前書き）

吉井明久のみんなに質問コーナー！

明久『よい子のみんな吉井明久の質問コーナーへようこそ。ここでは僕がこの小説のみんなにむちゃぶりな質問をしていくコーナーだよ』
よし早速いつてみよう！

今日はこの人！』

雄二「…」

やあ雄二。質問コーナーへようこそ

「明久！？てめ一の仕業か！！後で覚えてやがれ！！」

では質問いくよ

「ちっ」

Q霧島さんに告白したい？

「明久てめえええ!!」

したい？

「ふざけんな!誰が

「…雄二」し…翔子!」?

「…浮気は許さない」

「落ち着け!俺は う ああああ
」!

今回は霧島さんにお仕置きしてもらいました!

次回は誰でしょう!?!お楽しみに

七問目：弁当と仲良し少女と根本を弄って遊ば？

「く…耳が」

とんだミスだ…まさか僕まで聞こえなくなるなんて…。何故彼女達を助けたんだよ…あー何も聞こえない

「明久君大丈夫？」

何か言ってるうるした目で覗いてくるのは…鈴だ。赤い瞳から今にも溢れそうだな。というか本当に聞こえないなあ…でも言いたいことはわかる

「…ふん。まあいいさ 根本は潰せたんだからね」

あいつのことだ。きっと仕返しにくるつもりだろうが…あいにくそうはいかない

「明久君大丈夫ですか？」

「…？姫路さん」

「宣戦布告に行ったと聞いたので…。あつ…さっきは怒らせちゃってごめんなさい」

何を言ってるのかさっぱりわからないけど深刻な顔をしている…

「そんな顔しなくても大丈夫だよ。それより雄二は…」

「坂本ならあつちよ？」

「……雄二は何処だ？」

「だから坂本ならあっち」

「…雄「いい加減にしなさい！」ぐふうあ！」

な、何だ！？痛たたたた！腕がああ！美波か！？ぐうう

「島田ストップだ！」

陽哉がすぐに美波を取り押さえる…何でいきなり間接技を

「明久どうしたのじゃ？」

秀吉がこつちを覗きながら見つめてくる…ああなるほど

「大丈夫だよ秀吉。ギリギリ折れてないから」
「？」

あれ？何で余計に深刻な顔に

「明久さんどうしたんですか？」
「光奈…」

黒く長い髪を靡かせながら光奈が近寄ってきた…

「……疲れたような顔してる」

「ムツッリーニ…？」

「まさかだと思うがお前聞こえてるか？」
「？」

うん！？何でみんな近寄ってきてんの！？そんなことより雄「……」

「とりゃあ！」

「うおおあつ！」

背中に何か柔らかい物が…！！友里恵！？何を…

『吉井：万死に値するな貴様は』

「黙ってるF」

『！？』

「うわあ！抱きつくな！僕に抱きつくなあ！」

友里恵はそんなことも聞かず耳を掴んできた…うつ

「あ！やっぱりだ！！鼓膜が破れてる！」

「凄い視力だな」

「みんな何言ってるんだよ！」

「ごめんごめんアッキー！」

友里恵はスルリと降りてすぐに何か取り出す…紙？ペン？

（アッキー。アッキーの鼓膜破れてるよね？）

サラサラと友里恵は書いて僕に見せる…！？さっきの行動は僕の状態確認だったのか…

「ああ。何も聞こえないよ」

（何があっただ…）

「…Bクラスの宣戦布告に行った時…事故っただよ」

（……まさかお主のクラッカーか！？）

「うん…」

（…本人が事故るなんてまずおかしい）

「流石ムツツリー二…。実は近くに女子がい（明久君お話ししましょうね？）（覚悟できてるんでしょうね？）」

邪悪な殺気！？というかなんで僕が女子と関わるだけで…僕だって関わりたくないんだよ！

（（吉井君））

「黙ってるF」

陽哉がクラスメイトを睨みつけている…はあ……あの連中は

「とりあえず僕は雄二と試験召喚戦争の話しがしたいんだけど」

（わかりました明久さん。私から言っておきますね）

「うん。ありがとう光奈」

（／／／）

ん？何だあの文字？

いや……そんなことより！！

（（ ！！））

あの二人を何とかしないと殺され…る

（ねーねー明久君明久君）

「何だ！ー今は話している時じゃ…」

（明久君って…好きな娘いるの？）

「鈴…君は何を（明久君！好きな娘いるんですか！？）

（正直に言いなさい！）

（できれば私も知りたいです…（そしたら妄想が膨らむ）

「何だ！？痛たたたたたたたた！腕碎けるから！美波！歩けなくなるからああ！」

（…間接技…）

「光奈ああ！お前は妄想するなああ！」

畜生！鈴の奴！後で覚えてろおおおおおおおお

『バキイ！』

『ボキイ！』

「にぎゃあああああああああああああ！」

八問目：誤算と仲良し少女とその名は高木恋奈

ゴキン！ゴキン！

「ふう…」

間接を戻してとりあえず一段落だ…全くあの二人を何を目的に暴行を加えるのか知りたいよ

「それにしても…」

顎に手を当てながらじつと考える…何を考えているかは…まあBクラスのこともあるけど…二人のことだ

「菊入と岩下だっけか…どうしたもんか」

Bクラスの指示を断つのが目的であつたんだが…二人だけ平気となると…いや雄二に話してあるから大丈夫なんだが

「何故僕は彼女達を…」

これだけは考えても浮かばない…全く僕らしくないな

「はあ…まあいいか。今回僕は勝手にやらせてもらうつしよつ」

つまりは菊入と岩下を潰す…そして根本を叩きつぶしてやる

『…さあ…みんな行つて来い！！狙うはシステムデスクだ！』

『サーツ！イエッサア！』

チャイムの音…雄二の指示…そしてみんなが一斉にBクラスへと駆け出して行った

始まったか。今回は数学を主力…つまり

『サモン！』

『『うわああ!』』

陽哉が無双になる時だ…陽哉は理数系を得意としていて…特に数学は高成績

補給試験があつたから点は更に上がっている…光奈、鈴、友里恵にはサポーターとして戦ってもらう

。まあ美波や姫路さんがいるから問題ないだろう

「さて…長谷川をどこまで進められるかな」

雄二は教室で考えながら外を見ていた。僕や秀吉、ムッツリーニは待機中だ

まあ僕は勝手に行くけど

『よし!道が開けた!みんな行くぞ!』

『オオオオオ!』』

陽哉が上手くやってくれたらしい…外を見ればすぐわかる。みんなが一気に押し寄せて行く

けど問題はここからだ

おそらく今はいい状態だけど…あっちには竹内がいるはずだ。陽哉を潰しに行くには竹内を連れてくればいいのだから早めに陣形が崩されるのは間違いない

「そろそろか」

僕はしばらく考えた後…教室を開けようとした

が、先に扉が開かれそこには…あの二人がいた

「…なつ!？」

馬鹿な…あの状態からどうやってぐり抜けてきたんだよ!

く…まずいな。雄二は代表…打ち抜かれたFクラスは負けだ

『吉井明久君ね?』

「あ、ああ。そうだけど」

岩下さんは紙を取り出しペンで書いていく。そうかこの二人は僕の状態を知って

『…廊下に出てくれない？』

廊下に出る？雄二が目的じゃないのか？

雄二達は首を捻りながらこっちを見ている…一体どういつことなんだ

『話があるんだけど…いいかな？』

話し？なんのことだ…とりあえずもしもに備えて…

「わかったよ。」

そう言ってからドアを開き二人と一緒に出て行った

『どういつことだ？』

『どう見ても明久に用があったらしいの…』

『……………秘密の話し』

『何はともあれ助かったな…よしムツツリーニ、秀吉。例のことをするぞ』

陽哉 side

「サモン！」

関原陽哉 Fクラス

数学 320

俺は召喚獣を操作しながら周りの奴らを蹴散らしていく…よしい調子だ

『竹内先生を連れて来たぞ！』

「何！？」「」

くっマジカヨ。俺の出番もう終わりなんて…

「陽哉君！私に任せて…！」

「私もやるぞー！」

鈴と光奈は俺達の前に立ち守るように召喚獣を召喚した

『『サモン!』』

光奈、鈴 Fクラス

現国 280、240

『馬鹿な!?!』

『なんだあの点!』

『なんだあの点!』

ん? 同じことを言う奴が..... ああ。 明久のクッラーか

「『いくよ!』」

二人は威勢よく飛び出し辺りの生徒を倒していく

「私も行きます! サモン!」

ここで我らの姫路が登場して大勢は逆転し俺達が有利になった

姫路瑞希 Fクラス

現国 320

「よし！みんな姫路さん達に続け！」

ん？またBクラスの……げえ！？Bクラスに向かった奴ら教室側でやられてる！！

やべ……でもあれは古典か……くっ

『うわああー！！』

『戦死者は補習！』

「く……すまないみんな……」

落ち込んでいるのもつかの間……有利だった姫路達が追い込まれ始めた……ってまじか！？

「この人……強い！」

「あう！」

そこには長い銀髪に赤目の子が姫路達に攻撃をしていた

「……誰だお前？」

銀髪の子はくるりと振り返ってにこっと笑った……

「私は……高木恋奈^{たかぎれんな}です。よろしくね」

「あ、ああ」

そう言っている間に……高木は三人を倒した……

高木恋奈	Aクラス
現国	650

「……なんでAクラスが!？」

驚異的な点数とBクラスではない彼女に俺は呆然とするしかなかった……

『じゃあ……悪気は無いけど君も補習室に行つてね?』

その言葉でハッと我に返った…危ない危ない…危つくやられるところだった

「そうはいくかよ！何故なら」《船越先生、船越先生。至急体育館裏までお越し下さい》「」

この声は須川か！…ようやくか雄二の奴…

『《吉井明久君が体育館裏で待っています。なんでも生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》』

うわ…明久ドンマイ…としか言えない…船越なら絶対来るよな…

「……………ふうん」

ん？ちよっ…なんか高木から変なオーラが…死に神！？あれ死に神いい！？

「ねえ関原君」

「は、はいい！」

その声はあまりにも冷たく俺は額から汗を流した…やば体が

「…アレハダレガハンニンカナ？」

「か、片言…。えっと放送は須川と言う奴で主犯は代表の坂本雄二」
「…サカモトユウジですかあ」

いつ！？オーラが黒から赤に…血だ…あれは間違いなく血だ！

「では…ちゃっちゃと片付けちゃおうかな…」
「そ、そうはいくか！俺がいるから…ここは通さないぜ！サモン！」

この点ならAクラスと言えども簡単には超えられない…雄二を打ち取らせるわけにはいかないんだよ

「凄いですね…300オーバーなんだ…。でもね」

高木は一瞬溜めてから召喚した…。姿は鎧が装備され赤いミニスカ
ートに双剣だ…

「怒った私を止めるのは不可ですよ？」

「マジカヨ…」

俺は圧倒的差で敗北をきした

「明久！今助けに行きますからねー！」

高木はバビューンと高速で走り去って行った

雄二死ぬなよ？

八問目：誤算と仲良し少女とその名は高木恋奈

この文月学園に新しい転入生がやって来た…彼女は成績が優秀で天才と呼ばれている

そして彼女は今回…指輪の為に学園長の許可を得て試験召喚戦争へと参加した

本来の目的は吉井明久の戦力分析と彼女の実力をしる為のBF生徒討伐…

なのだが

明久side

「何の用かな？」

『…えっ…と』

『あれよ！あれ！』

二人の言葉に疑問を抱く。岩下は真っ赤になり菊入は必死になっていた

「理由が無いなら…補習室に行ってもらうけど？」

「…！」「」

僕だって暇じゃない…だから二人と話している暇は無いんだけど

『ああもう！何やってるのよ私達！』

『所詮観察処分者よ…私達はそんな屑と仲良くする気はないわ！』
「言いたいのはそれだけか」

二人はハッとなり僕を見るが…どうやら美波同様罵倒したいだけのようだったな

『違うの吉井君！』

『そうよ！けしてあなたが馬鹿だからじゃなくて…』

「^{サモン}試獣召喚」

キーワードと共に姿を現す召喚獣…赤い制服に二丁銃だ

吉井明久 Fクラス

数学 150

『あ！』

『なんでこうなるの！』

「戦闘開始…」

二人を冷たい目で見ながら力チャリと構える…

「ほら早く召喚しなきゃ君達を撃つよ?」

「!」

「…律子! あんな奴やつつけるわよ!」

「…え、ええ」

「「サモン!」」

岩下律子 Bクラス

数学 240

菊入美由美 Bクラス数学 265

ふーん。流石はBクラスか…Dとは大違いだな…

「律子!」

「真由美!」

「「行くわよ!」!」」

息ぴったりだな…ならちようどいいや。こいつの力を使ってみるか…でもまずは

「相手してあげるよ」

銃を構え素早く走り出す…頭上からハンマーが振り下ろされ上手く避けた

「えい！」
「ほっ！」

もう一人もハンマーを振り下ろすが避けて脇腹に銃を突きつける

『バアアン！』

銃を打ち込み菊入の召喚獣を吹き飛ばした。…やっぱり点数は少ししか減らないか

「たあ！」
「遅い！」

ハンマーを掴み腹に銃を乱射する…岩下の召喚は叫びながら吹き飛んだ

「強い…」
「そんな…」

点数は岩下が231で菊入が232か…中々強いな…

「じゃあ使ってみるかな…」

僕は赤い腕輪がついている方を前に突き出す

キーワードは…

『パワーアップ』

腕輪が光りだし僕の召喚獣を包み込む…たちまち召喚獣が赤いオーラをまとい点数も飛躍的に上がっていく

僕の腕輪はハンドレット…全ての力を百倍にするんだ。勿論制限時間があり…その時間は約30秒…

吉井明久 Fクラス

数学 15000

だが…使えばほぼ最強…教師など赤ん坊…生徒はそれ以下だ

「え！？何よあれ！」

「10000オーバー…」

「じゃあね…」

そう言って召喚獣は銃弾を放った…その動作はほぼ見えず…また

菊入真由美 Bクラス

数学 0

&

岩下律子 Bクラス

数学 0

…そして打たれかすら全くわからない…。まさに神…

「そ、そんな」

「……こんなことって」

二人はガクリとうなだれるがそんなの知らない…彼女達は僕に挑発をしたんだ。ならこのくらい当たり前だろ？

『戦死者は補習！！』

「「いやああ！」」

鉄人に連れて行かれながら彼女達は悔しそうに叫んでいた。……彼女達はこれから地獄が待ってるだろう

「…ぐ…ふ…はあ！」

体中に重い疲れと全身が痛む…これがハンドレットの発動条件だ…かなり体力が消費する為あまり使いたくないんだ…フィードバックが3とするとこれは12つて所だ

「ぜえ…。よし…後は根本を…」

体がきついな…やっぱり腕輪は使う時を考えないと…くそっ…しばらく休憩しなきゃ走れないな

「ふう…とりあえず雄…《船越先生、船越先生。至急体育館裏までお越し下さい》は？」

須川？何だこの放送は…

《吉井明久君が体育館裏で待っています。なんでも生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

その放送に僕はピキリと固まった…いや あのだ…

「須川あああ…！」

野郎！何を言ってるんだ！…まさか雄二の差し金か？なら二人まとめて地獄行きだ！くそ！早く逃げなきゃ船越が来る！！

「ぜえ…ぜえ…」

あー！！こんな時に…最悪だ…僕はこんな所で人生を終えるのか…
…」

目をつぶってじっとしながら溜め息をつく。もう駄目だと思った時

ダッダッダ…！

凄い勢いで誰かが走ってきた。ああ船越がもう来たのか…

「あき ひ さ ！！」

違う…船越じゃない！

「！！まさかこの声は…」

そうだとしたら有り得ない！だって彼女はここには居ないはずだ…

ダッダッダ！！バツ！

そちらを静かに振り向くと案の定…有り得ないはずの少女が走ってきたではないか。そして盛大にジャンプをして…

「明 久 ！」

「…っと」

グシャ！ズザザザ！

「あう…」

「……はあ」

ひょいとかわすと盛大に壁にぶつかり、ズルズルと倒れていく…こいつ昔と全然変わらないな

「痛たた…」

そして…スカートがはだけて下着が見える…！鼻が熱いんだけど…

バツ！！

彼女は素早く起き上がって…僕の顔にのしかかってきた…

「！？／／／／」

そこには男の夢とロマンがあふれるものが顔に当たっている…つまり…彼女の下着の下敷きになったということだ

「ふぐ！！！」

！！畜生！固定されてる！布が顔にこすれるうっ！／／

「明久！久しぶり！どうかな？久しぶりの感触は…」

「…ふざけるなあ！早くどいてくれ！」

「え？お尻が良かったの？」

「馬鹿かあああ！？／／」

僕は勢い良く起き上がり彼女を跳ね飛ばした

「…もう。明久は相変わらず乱暴だなあ？」

「違うからね！？君のせいだから！」

「でも…気持ちよかつたんでしょ？」

「ふざけるなあ！そんな訳……あるさ」

「明久は欲望に忠実だね……」

にこにことしているこの銀髪に赤い瞳の少女は高木恋奈…小中の仲であり…いわば幼なじみ関係だ

彼女は中2に外国へ転校したはず…なのになんで…

「…とにかく邪魔しないでくれ恋奈。僕は今からキノコを討伐しなきゃならないし船越から逃げなきゃならない」

「…あ。船越先生ならさつき…」

「え？」

まさか…にこにこしていてわからないが船越を…殺ったのか！？

「そつだ！明久。坂本君知らない？」

「坂本？ああ屑雄二か。あいつなら教室に居るよ」

「そつか。ありがとう明久」

「…！！抱きつくな！！」

「？でも明久こういうの好きだったよね？」

「…前まではね」

「…じゃあ私の胸の大きさは？」

「……立派なF」

「ふえ！？／＼なんでわかったの？じゃ…じゃあ私の下着の色は？」

「ライトピンク」

「…！！いつ見たの？」

「お前が見せたんだろうがあ！！（、o、）」

「えへへ／＼バレちゃった…」

「バレちゃったじゃない。バレバレだよ…」

「……折角明久の為に我慢して頑張ったのに……」

「ん？何か言った？」

「ううん…そ、それより私も根本君を討伐していいかな？」

「あれ？雄二に用があるんじゃないの？」

「い、今は明久と居たいの！／＼」

「ふーん。そりやどうも」

「明久の鈍感」

あれ？何で恋奈の声が聞こえるんだ？

八問目：誤算と仲良し少女とその名は高木恋奈

「……！！」

冷や汗が流れる…今の状況を遅れて理解する

「くす…可愛い」

僕は…根本を奇襲する為に二階へ行つたのだが…

突然壁に叩きつけられ何かを突きつけられた

デザインナイフだ

デザインナイフはとても切れやすくて前に使用した時…少しかすっただけで血が流れなかなか止まらなかった

そんなことよりも今怖いのは彼女…幼なじみの恋奈だ…とても暗い目でこちらを真っ直ぐに見ている

「どうして？さっきまで君は」

「うん。あなたが性格が変わったから殺したくなったの」

笑顔で告げる彼女は恐ろしく…僕は足が震えていた…何故性格が変わっただけで殺すんだよ

「……恨みでもあるのか？」

「…ないわ。ただ…」

「ただ…？」

「しゃべらないで…」

理不尽にもほどがある…！けど首に突きつけられたデザインナイフは冗談ではない

「私…好きな人がいたの」

「……」

「その人は馬鹿で優しくて勇敢だった。でもその人には何かが足りなかったの」

恋奈は冷たい言葉で僕に言い放つ…背筋が凍りそうだ…

「その人は…鈍感だったの…恐ろしいくらい」

「……………」

デザインナイフがゆっくりと首から外されていく…でも恐怖はまとわりついたままだ

「ね…明久君。明久君の腕輪って確か体力と精神を削ってしまうんだよね？」

「ああ。そうだけど…」

おかげでクタクタだ…あと二回が限界だ…というよりなんで知ってるんだ

「そう…」

『ビシュッ!』

「が！があ！」

鋭い痛み思わずうずくまってしまった…痛い…目下から血がドクドクと流れている

「やっぱり鈍くなるんだね」

「お前！わざとやったのか！」

「…試しただけよ」

「……………う！」

反論しようと試みるが彼女がデザインナイフをちらつかせ恐怖を覚えさせる…今だに痛む場所を押さえながら睨みつける

「…そうだよ…明久はこれが好きだもんね」

『ビシュッ！ビシュッ！』

「！ぐうああ！あ…ああ！」

頬…鼻の当たりが鋭く痛み血がドクドクと流れ始める…痛い…

「…ふふ。そんな態度だから明久君はモテないのよ」

「…余計なお世話だ」

「…あら？今度は目を切るよ？」

「ひっ！」

思わず怯えながら横へと逃げる…恋奈はただ笑っているだけで…僕はチャンスとばかりに…いや逃げるように廊下を走って行った
「…ふうん。やっぱりFクラスね」

「はあ！はあ！くそ！」

歯をギリギリと食いしばりながら必死に保健室へと走っていった

雄二 side

「くそ！なんで…他のみんなは…」

無駄だ根本。味方なんて既にもいない…明久を生贄にしたから…俺達（陽哉がほとんど）は無双状態になったんだ。島田は姫路が助けたし…

そんな悔しい顔されたって笑うことしかできないな

「……………くそお！」

根本はやけになったのか召喚獣を召喚しようとする…が…

「させません！月夜光奈が根本さんに現代文で勝負します！試獣召喚！」

根本の敗北は決まっていた

月夜光奈 Fクラス
現代文 325

V S

根本恭二 Bクラス
現代文 231

「この勝負…俺達の勝ちだ」

月夜の召喚獣が根本の召喚獣の首を切り…勝負が決まったのだった

「久しぶりの再会だった？」

「駄目駄目。明久君…振り向いてくれないもん」

「馬鹿な所だけが取り得だったのにね」

「…那杜撰なずさん。あなたも酷い人ね。明久君を振っちゃうなんて」

「…所詮…観察処分者だからね」

「…そう。」

「恋奈…あなたはどうかなの？」

「後悔してるわ…なんで殺すなんて言ったのかわからないわ」

「…あなたも…所詮…同じね」

九問目：傷とAクラスとそれはまさに運命だった…

「……離せ!!」

「おとなしくしろ根本!」

「次はゴスロリに着替えてもらっからな!」

「なっ!聞いてないぞ!」

そんな騒がしく気持ち悪い光景が見えた…

「痛っ!痛い痛い痛い!」

「我慢よ吉井君。全くどうやってたらこんな傷がつけれるのかしら」

「…あぐあ!」

涙目になりながらも僕は保健の…新田京子…年齢24歳で茶髪のセミロングの先生に手当てしてもらっていた

どうやらBクラス戦は終わったようで根本の悲鳴声が物凄く聞こえるんだけど

「デザイン…ナイフで切られたんですよ」

「え!?デザインナイフって…一体誰に」

その質問には言葉が詰まる…何というか…あいつだって言うべきなんだろうけど口に出せない

「…クラスメイトに…」

「クラスメイト…って…それはまたどうして?」

しばらく…考えた後に新田先生をじっと見つめた。当然笑顔で

「……………嫉妬ですかね？」

「雄二……」

教室の扉をガラリと開けた先には悪友がじっと立っていた

「おう明久…生きてたのか」

「…生きてたじゃない。お陰様でこっちは危なかったんだよ？」

「…なにお前だから別に気にはしないだろう」

「酷……」

雄二は軽く睨みつけてから卓袱台へと近づいた…まあ荷物があるしね。もう帰宅したい気分だ

「ん？明久…船越に殴られたのか？」

「…は？」

「馬鹿かお前は…その傷はどうしたのかと聞いてんだよ」

雄二が言いたいののはたぶんこの顔のことだろう…ガーゼを目下、頬、鼻に貼ってるんだ。確かに気になるだろうね

「ああ…これはAクラスにやられたんだ」

「何？Aクラス…陽哉もそんなことを言ってたな」

「…どういうこと」

雄二はいつもとは違い真剣な眼差しでこっちを見てくる。なるほど…ただごとじゃないな

「陽哉が戦争最中にAクラスの生徒に戦死させられた」

「まてよ…それって反則だろ？」

「ああ…普通は他のクラスが戦争最中のクラスに攻撃するのは駄目だ」

「つまり…ババアの仕業ってことだね」

「ああ…恐らく陽哉とお前を襲ったのは同一人物だ」

「……………」

静かに鞆を持ち教室の扉を開く。一体何を考えてるんだあのババア

「明久…気をつけて帰れよ」

教室を出る前に雄二の静かな言葉が響いた

『PNP』

画面に種類の文字が映し出されすぐにメインゲームへと変わる。いつもと同じように帰りはゲームをする

（………… Aクラスは何を考えているんだ）

『なずさ：「明久君！私あなたに伝えたいことがあるの」』

（…何故…恋奈は邪魔をしたんだ？何か理由があってやるはずだ…
ババア絡みなら何かの開発だろうけど…）

『なずさ：「私ね…明久君のことが」』

（……鈍感…女性………まさか！？）

ゲームを進めずに周りを見渡す…もしそうなら恋奈に何があったんだ…彼女は人に手を出す人間じゃないのはよく知ってる

「……………Aクラスの中に…僕らへ何か恨みをもった連中がいるのか」

ゆつくりとボタンを押す…すると画面が切り替わる

『なずさ：「あなたのことが好き」』

「！？そうか…ようやく繋がったぞ」

やってくれるな…あいつ。まさか人の幼なじみにまで手を出すなんて…そこまで僕は君達には低評価なんだ…ね

『明久君…ゲームなんかしてどうしたの？』

「これが僕の日課だ。おかしいんだろ？好きなだけ笑えよ…恋奈」

ギロリと後ろを振り向くと彼女はニコニコしながら立っていた…つきまとわれてた訳か！

「笑わないよ別に」

「じゃあ殺す気か？」

風が静かに吹き渡り彼女は相変わらず表情を崩さなかった…

「そうだとしたら？」

「返り討ちにするさ」

「あら？でも明久君さっき逃げたじゃない」

「見くびるな。普段の状態に戻れば訳ないさ」

「…そう」

互いに睨み合ったまま動かずいた…

「恋奈…一つ尋ねたい」

「何かしら？」

「君は…僕が好きか？」

再び周りが沈黙状態になる…恋奈はくすりと笑ってから口を開いた

「ええ。昔はね…でも今は友人として好き」

「…そうか」

やっぱり彼女は僕を異性として好きではなかったようだ…

「今の明久君は冷たいから…何を言っても」

「…それが今の僕なんだよ恋奈」

そんな僕を好きになつてくれる奴なんて本当に少ないだろう…鈴とか

「へえ…同情の余地はいらないね」

「ああされたくもないさ」

もう君とは分かり合えないな…悲しいよ。幼なじみだったのに…今じゃ赤の他人みたいだ

「明日…決着をつけよう」

「ええ…ちよつどいいかもね」

それだけ言つて恋奈は去つて行つた…その時デザインナイフは握れていなかった

十問目：ナンパと…揺れた心

「ふう…今日はやけに重いな」

『スーパ―文月』から出て数分…僕は両手に持っている食材が入っているレジ袋を見た

いつもなら訳ないのに今日に限って重たく感じる…

「鈴の奴…まさか部屋が隣だったとは」

鈴は光奈、陽哉、友里恵達と一緒に僕が住んでいる家族マンションの隣の部屋にいる

だから朝…僕の部屋に侵入できたんだ。どうやって入ったかはわからないけど

「まあ今日はみんなが来て遊ぶからこんなに沢山買ったんだけど…

……」

合鍵はもしもの為に陽哉に渡してあるんだが…まあ大丈夫か

「…早く帰った方がいいよな」

歩く足を早めながら夕日に照らされた道を歩くのだった

「……………しまった！」

周りを見渡せば真っ暗だ…灯りがあちこちついているけど…夜なのは変わりない

「僕としたことが…『ドラゴンnine』に夢中になってしまってたよ」

いつもあることなんだが夜までなんて今までなかった…このゲームが面白いせいなのか…それとも

「違う何かがあるのか…どちらにしろ陽哉達を待たせてるから早く帰らねば」

「……………なあなあ姉ちゃん。俺達と遊ぼうよ」

「い、いえ…遠慮しておきます」

「そんなこと言わずにさあ……………」

「こ、困ります！」

「ヒュー！可愛いね」

しばらく走っていたら近道に使っていた路地裏から…何かが聞こえた
「…ナンパか。全くだいい年したおやじどもがみつともないな」
僕には関係ないことだ…こんな時間に歩いている奴が悪いしね

「あつ！助けてください！」

『…………』

女の方は歩いていった人に助けを求めるが当然無視…まあ当たり前だ…誰だって関わりたくないしな

「おっと！早く帰らなきゃ」

ゲームをしまつてからナンパが起きている方へ歩く。助ける訳じゃない…あそこを通らなきゃ帰れないからだ

「……………！！助けてください！」

「嫌だ」

「え…………？」

彼女の前を通って行く…学生だ…しかも文月学園じゃない

『諦めな姉ちゃん！』

『結局誰も助けてくれないんだよ！』

（その通りだ。現実そう甘くないんだよ。怨みたいなら好きなだけ怨めばいいさ）

荷物を持ち直しズンズンと通り過ぎて行く…この路地裏を抜けたらマンションがある道につく…

助けてください！！私…また男の人に犯されたくない！

『無駄だつて言ってるだろ姉…ぐふう!』

『なつ!?!』

『え…?!』

中年おやじを殴り飛ばした後軽く溜め息が出た…結局こうなるんだ
よな

「てめえ!?!さっきのガキ!」

「何のマネだ!」

相手はざつと六人くらいか……

「あ、あの「これ持つてて」え…」

彼女に荷物を預けた後に軽く手をグルグルと回す

「みつともないよ?モテないおじさん」

「殺せ!!このガキを生きて帰すなああ!」

一斉に飛び交ってくるおやじ達…一人を狙っておやじ達の攻撃覚悟
で鳩尾を狙った

「ぐふあ!」

「がつ!」

一人目のおやじは目を白くしながら後ろへとふきとんだ。そして僕は
顔に一発貰う

「あっ!？」

彼女…少女が驚くのも気にせず殴ったおやじの頭を掴む

「う…ぐ…ぬおりゃあ!」

「ごふっ!」

頭突きを喰らったおやじはふらふらとなりながら倒れた

「おりゃあ!」

「…が…!」

横からおやじのストレートが炸裂し、口から赤い液体が出る……上等だ!

「しゃああ!」

「ぎゃふん!」

おやじにアッパーを打ち込み跳ね上げる…おやじは血を吹き出し倒れた

「けほっ…ああ…やっぱりなまってるなあ」

多分あの時恋奈とやりあつてたら確実に死んでたぞ僕…

「はあ…陽哉達に怒られるの確定かな」

倒れている六人のおやじ達を見ながら少しばかり溜め息が出た

「あ…あの……」

「ん？何？」

さっきの少女は不安な顔になりながら近づいてきた

「助けてくれてありがとうございます！」

ペコリとお辞儀をし…黄金色に近い茶髪の髪が垂れる…

「別に…助けた訳じゃない」

「え…？」

顔を上げた彼女の瞳とぶつかった…綺麗なパープルで制服のブレザーは文月と似ているがネクタイではなくリボン…スカートも青いチエック柄だ…

「というよりスカートが短いんだよ。だからあんなおやじに狙われるんだぞ？」

「う……そ、それはわかってますけど……」

「……例に言う美人に見せたい…足を長く見せたいとかいうやつか」
「……はい」

全く…なんというか………ん？

「痛…うわ…傷広がってるよ」

血がベタベタだよ…デザインナイフで切られた場所

「え…？ちよつと見せてください」

「お、おい！」少女はぐいつと顔を自分の方へ引き寄せる…胸がデカいんですけど

「…なるほど…ちよつと待ってくださいね」

少女はガサガサと自分の鞆をあさり始めた…胸が揺れて…いかんいかん！

「あつた！…ちよつと痛いですよ？」

「え？いだあああああ！！」

何？何だよこの痛みわあああ！

「すみません！…刃物で切れたならばい菌が入らないようにしないと」

そう言つてまた少女は引き寄せてきた…

「ちよつ！／＼／」

「うん…これで大丈夫」

「…お礼は言わないならな」

「はい。これでおあいこですしね」

「……………／＼／」

くっ…調子が狂うな……………

「あの…お礼ならいくらでもしますからね？」

「……………いや。いらない」

「で、でも感謝してるんです！！私を助けてくれたのはあなたが初めてなんです！」

「だから…助けた訳じゃな…」

な、なんだ……………胸が熱く……………

「誰も私を助けてくれなかったんです…」

「あ、敬語じゃなくていいから」

「えーあ…じゃ、じゃあ…」

彼女の名前は麻生理香ませいりか長いストレートに姫路さんに匹敵するたわわを持っている

気弱なところがあって…優しそうな奴だった

理香は弥生学園の二年生にして保健委員長らしい…だから傷の治療を知ってたんだ

彼女は僕と同じように…男に騙されたあげく犯されたんだ…

「あ…ここで大丈夫だよ」

「そう？じゃあ気をつけてね」

「うん…吉井君も…また会おうね」

「………僕は御免だよ」

「くす…そうかもね。おやすみなさい吉井君」

………大丈夫だろう。二度とナンパされたりはしないはずだ

「ああ…おやす…ん………」

え…？何か柔らかい…感触が

「………またね吉井君」

「え………あ…？」

これが僕の初めてのファーストだった…

十一問目：ミスと再決戦とエンド

「……………朝か」

昨日の記憶は何処へ行ったのか変える前しか覚えていない
手にはいつも通りゲームが握れている

「…今日はAクラスとだったな…」

気合いを入れ直さないと…なにせAクラスには恋奈とあいつがいる
…！

「ふう……………」

少し息を吐いてから服を脱ぎ捨てる…相変わらず胸辺りに傷跡がある…

「今日で決着をつかせてもらっぞAクラス…」

頭がぼーとしていたせいか雄二が言っている作戦が頭に入っていない

「おい明久！」

「……………どうした？」

「どうしたじゃないだろ…説明聞いてんのか？」

…聞いていないと言うよりは聞こえないがふさわしい…

「大丈夫か明久？」

「明久さん昨日もぼーとしてましたよね…」

陽哉と光奈がじつと覗き込んできた……僕としたことがどうしたんだ一体

「たくっ…気合い入れないと簡単には行かないぞ」

「ああ…ごめん」

本当にどうしたんだろう僕は……何故か頭に何も入らない

『…くす。必ず後悔するよ明久』

「!?!?……」

何ださっきの……どこかで聞いたことがあるような…

「アッキー大丈夫？」

「…ああ」

この時の僕は何が起きてるか全くわからなかった
時期に起きる…イベント。そして…

「よし…明久。Aクラスに宣戦布告をして来い」

「断る。お前が行けばいいじゃないか」

いつもいつもやられてたまるか…！今回だけは無理だしね

「そうだ…鈴」

「何？明久君」

「お前行ってこい」

「…え！？い、嫌だよ」

「……………はあ。せつかく…お前のこと尊敬しようと思ったにな」

「行つてきます！」

鈴は教室を飛び出し光のように消えて行つた

「案外酷いなお前」

「……………別に…ただ信賴してるだけさ」

後ろから何かオーラを感じたが気にしないでおこつ…

しばらくすると無傷の鈴が戻ってきた……………さて僕は僕で準備しないと

『面白いことをやってくれるじゃないかあの糞ガキ…まさか教師を利用して試験召喚戦争をするわけね』

『…はい。今日の午後にはAクラスと試験召喚戦争を行う予定です』

『ちようどいい機会さね。ちよいとAクラスの高木を呼んでくれな
いかね？』

『高木さんですか？ああ。例の指輪のことですね』

『そうさね……………高橋先生のクラスの子で最も優秀な彼女なら…この
真紅の指輪を使えるだろうしね』

『ええ…しかし吉井明久についてはどういたしますか？』

「あいつについては処分は確定してるよ……」

『では戦争後と言うことでよろしいですか?』

「ああ。頼んだよ。」

Fクラス吉井明久

以下の生徒を転校処分とする

学園長 藤堂カヲル

[illegible]

廊下からかん高い声が響いた：ポニーテールを揺らしながらひたすら笑う彼女は自分の教室であるＡクラスへと向かっていた

『もつと……痛めつけてあげるわ明久。私の……憎しみはこの程度じゃないから……』

まるで蛇のように……蠢くその影は……吉井明久に知らず知らずの内巻

きつき…そして毒牙を向けようとしていたのだった

そして…Aクラス戦が吉井明久にとって最後の試験召喚戦争になる
とは誰も知らなかった

「……僕は…一体どうしたんだろう……」

そんなことも知らず明久は…昨日の出来事をゆっくりと思い出して
いるのだった

これはハッピーエンドではない……バッドエンドなのだ

十二問目：馬鹿と天才と頂上決戦

さて時刻は1時。昼飯を食べた僕らは補充試験を終え準備をしている。あと30分で戦争が開始される

「じゃあ作戦の通り動いてくれ」

「おう！」

指揮官にして代表の雄二はみんなに指示を出す。今回は一騎打ち式ではなく戦争型らしい

「いよいよAクラスなんですな…」

「ああ。飯を返す時が来たな」

姫路さんの言葉に雄二は頷きながら外を眺める

そう。僕らは一度Aクラスに敗れた。理由はどうあれ負けたことに変わりない

「けど。そう簡単には行かないかもな」

「どういうことアキ？」

「Aクラスに霧島さん以上の学力レベルを持った奴がいるんだよ。腕を組みながらじっと考える。高木恋奈。あいつは昔から勉強を得意としていて今では学園で一番と言っていていいほどだ」

「でも。アッキーにかかればいちころじゃない？」

「いや。明久でもわからないぞ」

「どういうこと陽哉君？」

そうこう話しているうちに時間は迫ってきている。さて馬鹿と天才。今度はどちらが勝つのやら

恋奈 side

「いよいよね」

優子が時計を見て静かに立ち上がった…

Fクラス…か。優子の話したと一度勝つたらしいのよね

「…緊張してるの恋奈」

「別に…ただ早くあいつを叩きのめしたいだけ」

「そう…でも…それは私がやることよ」

那杜撰としばらく睨み合っていると代表の声が聞こえてきた

「…みんな。相手はFクラス…でも油断はしないで」

「…はい！」

「Fクラスなんか叩きのめしてやるんだから！」

「馬鹿なんかに負けないわ！」

あちこちからやる気と罵倒…流石代表…みんなのモチベーションを上げてくれる

「私が狙うの代表の坂本雄二ただ一人よ」

「……みんな頑張りましょう」

時刻は1時30分を迎え…戦争が始まろうとしていた。明久…必ず戦死させてあげるわ

「Aクラス！突撃！」

「「おお！！」」

ドアが開け放たれみんなが一斉に出て行く…さて、私も行くかな私が狙うのは代表じゃく吉井明久ただ一人

『Fクラス覚悟！』『馬鹿の癖に…後悔させてやる！』

『坂本！首はもらったああ！』

廊下からそんなことが聞こえる…どこまで持ちこたえられるか楽しみだわ…

けど悲鳴は聞こえなかった…Fクラスの人達なら確実に突撃してくると思うんだけど…

『うわああ！』

『きゃあ！』

『ぐは！』

「！？…これはAクラスの人達？…どうということなの？」隣にいた那杜撰が少し前を歩く

「ふうん。面白いことやってるね明久」

「…明久君？」

私は那杜撰の言葉で目を凝らして見てみる…すると廊下では

「はっ！」

驚異的な点数を叩き出している明久君がAクラスを倒していく…

「そう…明久君本気なんだ」

「…恋奈。みんなに指示を」

「わかってるわよ…」

なるほどね…そういう作戦か…やるじゃない坂本雄二…
私は少し前に歩く…そして明久君の前へと歩み出る

「恋奈……………」

「残念だったわね明久君。あなた達の作戦は失敗よ」

すると明久君はニヤリと笑った後に私達の方に向かって叫んだ

「させるか！ムツツリー二！」

「へ？ムツツリー二…誰それ？」

明久君の言葉に反応し教室から一人の男の子が飛び出して来た

「……………保健体育で勝負！」

「あっ……」

しまった……狙いは最初から私！？

『吉井明久なんか倒してしまえ！』

『Fクラスくたばれええ』

後ろから来たみんなは何も知らないから当然明久君の方へ走って行く

「駄「試獣召喚！」」

「残念だったな恋奈：君ならすぐに反応することくらいお見通しさ
！」

明久君はそのまま突撃してくるAクラスを迎え撃つ…

「試獣召喚！」

吉井明久 Fクラス
保健体育 642

&

土屋康太 Fクラス
保健体育 752

Aクラス 10人
保健体育 280×10

&

高木恋奈 Aクラス
保健体育 520

「…700!?!」

「残念だったな。ムツツリー二は保健体育においては学園一位なさ。それにモブなんて僕の相手じゃない」

「……………いくぞ明久」

「ああ！」

明久君はチャキリと銃を構え、土屋君は手裏剣とクナイを構えている

『なんだよあれ！？』

『勝てる訳…』

「く……………せめて厄介な土屋君だけでも」

「甘いんだよ。ムツツリー二は簡単には倒せない。いくらお前でもな！」

その言葉を合図に明久君は銃を乱れ打ち…土屋君は金の腕輪を掲げた

「加速」

キーワードを合図に土屋君の召喚獣が光る…え！？見えない？

「加速終了…」

「え？え？」

高木恋奈 Aクラス

保健体育 0

気がつけば私の点数は0になっていた……………

『うわああ！』

『きゃああ！』

Aクラス 10人

全滅………した？

「恋奈…学力だけじゃ全てじゃない。馬鹿だって…やる時はやるんだ」

そう言った後明久君は冷たい視線で見つめ…そしてAクラスへ向かって行く

『戦死者は補習！！』

私は西村先生に捕まって…補習室へと連れて行かれた

流石だね明久君…でも…私なんかよりもっと凄い人がその先に居るよ？

Aクラスとの再戦はFクラスの優勢から始まったのだった

馬鹿と天才と頂上決戦

「上手く言ってるみたいだな…」

俺は腕を組んで校舎を見上げる…ふん。明久の奴本気ってことが

「坂本君…私達も準備した方が」

赤咲はそわそわとしながら校舎入り口を見ていた

まあ確かにいつまでも上手く行かないしな……………よし

「わかってる。お前ら！指示した通り次の行動に移ってくれ！」

「「おう！」」

さて翔子達は気づいてるだろうから急がないとな。代表は必ず何処にいるのか場所を示さないといけない

だから俺はギリギリまで教室に待機していて、Aクラスと明久が勝負を始めた時に動く準備をしていた

だが…あっちには優等生がわんさかいやがる…そこでムツツリーニをサポートに回し明久が言っていた高木を討ち取らせる

奴は勘がするどいらしく俺達は何をするかわかってたらしい…ムツツリーニはサポートでもあるが口封じでもある

その間、外に出させたクラスメイト達に次の準備をしてもらい…準備ができた所で秀吉からの無線を通じ俺は外へと滑り降りた

まあ…廊下にいる奴らはなかなか気づけないから…恐らく翔子や久保辺りが来るだろうな

「明久…これはお前がどれくらい戦死させれるかに鍵がかかってる……………」

こういうことは言いたくないが……………頼むぞ明久！！

s i d e 明久

廊下にいる奴らを蹴散らしAクラスへと走る…。雄二達は外だ…当然代表は場所を教えないとならないから霧島さん達は動く…なら今やるべきことは出る前に奇襲することだ！！

『吉井覚悟！！』

廊下からは指示を受けずに来た奴らがなだれ込んで来る…愚かな…教室に残ってればいいもの！

「試獣召喚」

吉井明久 Fクラス

古典 653

赤い制服を身につけ二丁銃を持った召喚獣が姿を現す…相変わらず
凛々しい姿だ

『な!?!』

『600!?!』

後ろからはムツツリーニが大島を連れてAクラスと戦っている

「さあ来いよAクラス」

カチャリと構えてダッシュする…同時にトリガーを引いて球を打つ

バアアン!!

球は一人の生徒の召喚獣に直撃。そのまま連射して戦死させる

その時間およそ五秒

『うわあ!』

『きゃあ!』

更に勢いを止めずに次々と撃つ
指示は的確にそして確実に狙う…これは集中力と操作力がかなり必
要とされる

が…

僕なら可能だ…いや僕しかできない!

This is…これが観察処分者の利点だ！

『観察処分者のくせに！』

『学園の屑がふさげんなあ！』

「何とでも言え。でもそんな観察処分者に負けたお前らが屑だろ？」
冷やかにそいつらを見下ろす…ふんいい様だ…馬鹿に天才が負けると言うのは実に面白いな

『ふーん…明久随分と偉そうだね』

Aクラスの教室付近から声が聞こえそっちへ歩いて行く…そこにはニコニコと笑っているあいつがいた

「久しぶりだな那杜撰」

黒い髪を揺らしながらこっちへと歩いて来る…那杜撰

こいつは僕の元彼女にして地獄へ叩き落とした張本人だ

「くす…凄く男らしいね」

「…ああ。誰かさんのおかげでね」

「ふうん…」

お互いに笑いあったまま動かない…ああ本当にむかつくよこいつ

「いいの？代表行っちゃったよ？」

「ふん…別に構わないさ。足止めが僕の役目だったからね」

「そう」

「那杜撰…噂は聞いてるよ。上手くいってないらしいな」

その言葉に那杜撰の眉がピクリと動く…

「かわいそうに……」

「気持ちが悪くてないよ」

「当たり前だ」

「……許さないっ！」

那杜撰はいよいよ表情を変え僕を睨みつけてくる……

「あなたが悪いのよ！！あなたが観察処分者なんかになったから私の評判はがた落ちだった……馬鹿にされ……Aクラスに入って評判を上げようとしたのにあなたが試験召喚戦争を始めた噂が広まって……また変な目で見られて彼氏も変な目で見られ始めしまいには上手いかなくなった」

那杜撰はぐぐつと拳を握りしめ声をさらに荒げた

「全部！全部！明久が悪いのよ！？どうして観察処分者なんかになったの！？どうしてそれで平気なの！？どうして私が忠告したのに言うことを聞かなかったのよ！！」

「言いたいことはそれだけか？」

「え？」

「……やっぱりお前……最低だよ。結局は外しか見ていない……お前は臆病者だったのさ。愛する心なんてなかったんだよ」

「……何言ってるのよ」

「お前なんてもう僕の敵じゃないよ。ありがとう おかげさまで僕はわかった」

那杜撰が呆然としている中、僕はニヤリと笑い言い放った

「女は信じる者じゃない……ましてや近づくのも危ないってね……。でもあいつらはお前なんかよりずっとましだけだな」

「……！？」

そつだ馬鹿な奴らはろくな奴しかない。でも馬鹿だから…信用できる。Aクラスのように冷え切った奴らなんかにはわからないだろうけど

「決着つけようか那杜撰」

「…いいわよ。あなたを完膚無きまでに痛みつけてあげる…!!」

十三問目：指輪と大蛇とAクラス戦決着（前書き）

Aクラス戦終了です。次からようやく本来の話に入れます！

十三問目：指輪と大蛇とAクラス戦決着

『『サモン
試獣召喚！』』

ポンつと音を立てデIFOルメされた僕らが現れる…

那杜撰の召喚獣は黒い鎧に大剣を持っている。…ダークナイトか…
面白い

「へえ…明久の召喚獣随分と豪華になっただね」

「誰かさんのおかげだね」

銃を取り出し素早く二発打つ…しかし那杜撰は剣で体を隠して玉を弾いた

カキンカキンと打った玉は上空へと上がった

さつきのは試しだ…まずは相手の状況を調べてみるか…

「遅いよ明久」

「ふん…じゃあこれでも…かな？」

銃を一発打ち那杜撰は素早く剣で防ぐ…素早く背後に回り弾丸を二発打った

ガキヤアン！

「突出に根元で防いだか」

「…ふう」

点数は減っておらず変わりに手をパタパタと振る那杜撰の召喚獣がいた…おそらく痺れたからだろう

吉井明久 Fクラス
英語 628

VS

草原那杜撰 Aクラス英語 421

「よつと！」

那杜撰の召喚獣が振り回した大剣を避け懐へ打つ。那杜撰は素早く避けて逆に大剣で切り裂こうとしたてくる

「やばっ！」

かろうじて避けて転がる…あんなもので斬られたら痛いっての

「…は！」

「つておわあ！」

危なっ！なんだあのスピード…大剣つてあんなに早く振れるか？

「そらそら！！明久避けてばかりじゃ勝てないよ？」

「ちっ！」

くそ！那杜撰の奴操作技術が上手くなつてやがる…これは様子見どころじゃないぞ

「そこ！」

「…ぐわ！」

那杜撰の召喚獣は剣を突き出し僕の召喚獣の肩をかすらせた

「く…かすつてこの痛さかよ」

「まだまだよ」

「!？」

那杜撰は剣を槍のように持ち素早く突いてくる…くっ！早い！

「ぐ！」

「あはは！明久の召喚獣って遠距離だからこつこの弱いもんね！
剣が肩に突き刺さり激しい痛みが走った…」

く…馬鹿な。フィードバックって半分の打撃を受けるはず…なんだ
この痛み…まるで本物に刺されたようだ

「はあ！」

「ぐ！調子に乗るな！」

銃で振り下ろされた剣を防ぎ腹にもう片方の銃を突き付ける

「しまっー！」

「遅いぜ！」

スガガガと連射して那杜撰の召喚獣にダメージを与える。そしてひ
るんだ隙に後ろへ下がり片方の腕を撃ち落とした

「く…」

「はっ！！どんなもんだ」

吉井明久 Fクラス

英語 423

草原那杜撰 Fクラス英語

235

「…くっ。明久の癖に」

「隙ありだ！」

「きゃあ！」

「油断したな那杜撰…これでお前の召喚獣の両腕はもう無いぞ？」
だが、那杜撰は落ち込むどころか笑いだした…

「あはははははは！…わかったよ明久！そんなに痛みつけて欲しいなら…」

「！？」

そう言つて那杜撰は天に腕を掲げた…腕輪…いや違う！あれは指輪か！？

ブラッドイーター

キーワードを口にした途端…黒色の指輪が光りだし…那杜撰の召喚獣を変貌させていく…

「明久！腕輪と指輪の格の違いを思い知りなさい！」

「…なだよあれ！？」

那杜撰の召喚獣は巨大な蛇へと変わっていた…大蛇？

「これが私の指輪の力…ブラッドイーター…別名…
を食らう者」

血

「ぐああ！」

何だ！？何が起きたんだ…！？

吉井明久 Fクラス

英語 231

「ば、馬鹿な！？点数が一気に持っていかれ…がふあ！」

腕に走る激痛に思わず跪いた…那杜撰はニヤリと笑っている

「…え？」

さっきまで触れていた箇所には血が付いていた…まさか本当に…！？
「…がは！」

召喚獣が両腕を喰われたことにより僕の両腕からも体液が飛び出した
「が…」

フィードバック…が100%返ってきている！

「あら？降参かしら？随分と弱いわね」

「はあ…はあ」

くそ！腕が千切れそうだ…早く終わらせないと

「残念…蛇に噛まれて終わりよ明久」

召喚獣の蛇が大きく口を開けて迫ってくる…さてよ。まさか点数が
0になったら…

「うわあああ！」

素早く太刀を抜き大蛇に向かって突撃する

「食われるかあああ！」

ズバンッ

僕の召喚獣が蛇を一刀両断し…召喚獣は地に沈んだ…

同時に………

「きゃああああ！」

那杜撰の体から大量の血が流れ…那杜撰は跪いた…

「…やっぱりか…だが0になっても死にはしないんだな」

これが指輪の仕組みか………ふざけたシステムだ

「くふふ。明久…あなたはこれでもうさようならね」

那杜撰は血みどろの顔のままニヤリと笑った

「…終わり？どういうことだ…」

『吉井いいいい！！貴様何をやっている！！』

「鉄人！？まさかお前！」

那杜撰はニヤリと笑ったまま鉄人の所へ歩いて行く

「西村先生…補習前に保健室に行っていていいですか？」

「ああ…構わないが大丈夫か草原！？ 吉井…見損なったぞ。ま

さか女子に大怪我を負わせるとわな」

「な…！？違う！僕は乱暴なんてしない！！この指輪のせいだ！」

そう言つて那杜撰の腕を掴み指輪を抜こうとすると那杜撰が顔をしかめた

「馬鹿者が！！怪我人に何をするか！！」

鉄人は腕を叩いた後に思い切り顔面を殴りつけてきた

「がつ！……」

Aクラスの教室の中に吹き飛ばされてシステムデスクに激突した…
背中と顔にはとんでもない痛みが走った…

「ぐ…鉄人が…ふざけやがつて…」

システムデスクからのそりと起き上がり鉄人を睨む

「……貴様…。いいだろう…最後だ。特別にお前を鍛えてやる」
「最後だと？」

疑問に思っている暇も無く鉄人はこっちに向かって走り出した

雄二side

「ちっ…登場が早いな」

「……雄二の考えていることなんてお見通し」
「やっぱり翔子だけは来たか…くそっ計算ミスだ」

明久とムツツリー二に戦力を減らさせている間、俺達はあちこちの
出入り口に机や椅子を大量に起きふさいだ

これはAクラス達を消耗させる為だ。日頃からずっとパソコンを打
っているAクラスは運動をほとんどしない

だから俺達は外をフィールドに選んだ

そしてAクラス達は案の定俺を狙いに来るが…出入り口はあちこち
封鎖されている…

普通に履き替えて奴らは出ようとする…が出入り口は封鎖。なら違
う道から…だがこれまた封鎖

そしてあちこち回ってみるが全て封鎖されている…なら奴らがやることは何かすることだ

だが、これは体力を相当使う…Aクラスなら余計にクタクタだ
ようやく出れたと思ったら陽哉達がお出迎え…そして体力がへばっている奴らは複数の奴らで攻撃させる。そうすりゃあ流石のAクラスでも負けるって訳だ

だが奴らは違う

「どうやって来たんだ翔子」

「…愛子、優子、久保に手伝ってもらった」

「やはりか」

そうあいつらは簡単には倒せない…だが…工藤には月夜、木下には秀吉、久保には姫路と戦わせている。そして翔子には…赤咲だ

なのに何故だ

「そして…汀^{なぎ}にも手伝ってもらったから…」

「！？汀だと？」

聞いたことの無い奴だ…一体…誰

「あたしのことだよ坂本君！」

「！？」

振り返った瞬間…試験召喚獣を呼ばれ…翔子も加わり俺は敗北を余儀なくされた

そしてFクラスが負けで戦争は終わるのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8501x/>

バカとテストと召喚獣 ~ coldlove 『馬鹿な君が好き』 ~

2011年11月29日17時51分発行